あらずして、悲むべし、また社會の思想と道德とにその累を及ぼす。ウエレスレー卿も、兵士間の道德的標準は、良市民を審判すべき標準と異なり、また異なるべきものなりと曰へり。平和は好和の勇士を得て之を崇拜されざるべからず。再設時代は、破壞時代の工人と其の選を異にする者を雇使せざるべがらず。君、其の家を建つるに必ずや消防夫を傭ひ來らじ。

日露戰爭は我が國家に多大の瘡痍を殘したり。治すること其の宜しきを得ずんば、傷更に大に、痛いよ／＼劇しからん。

吾人の間に、製造、商業及び農業の勇士―工業の將帥、勞働の武士あれかし。今や吾人をして血に汚れし劍を打ち代へて、犁鍬、器械を造らしめよ。次回の戰鬪は、小銃大砲を以てするものにあらずして、算盤帳簿を以てするものなり。滿洲の野に戰ふにあらずして、世界の市場に戰ひ、露國

を敵とせずして、地上凡ての人民を敵とす。英邁なる青年、俊秀なる頭腦をして、向ふ處敵なき强大なる實業軍に參加して、其の戰鬪に從事せしめよ。我が國の天然及び經濟の富源を開發するは、是れ新たに吾人に賦與せられたる一大責務なり。之を盡す能はざらんか、兩大國に對する戰勝の光榮も、終に水泡に歸せん。

經濟上の戰鬪のみ吾人をして雄大ならしむるに足らず。また其の戰爭も啻に利益と權力とを愛するの念に優りて、一層鞏固なる根柢又は高遠なる思想を楯とせずば、以て持久すべからず。英國の商權は、利慾てふ脆弱なる支柱に依つて立つものにあらず。獨逸近時の發展すら、貪慾の故にのみ賴るにあらず。況んや、米國の赫々たる進歩も、卑劣なる『黃金萬能』の崇拜にのみ本づかざるをや。

何物かゞ何處にか活動するときには、其の處に必ずや活動せる其の物よ

りも、尙一層强き力の伏在するを見るべし。水際に搖ぐ濱の眞砂の一粒を見よ。—彼處には其の砂よりも力大なる者、卽ち吹き過ぐる風あり、打寄する波あるにあらずや。一個の流星が無限の空間を過ぎりて落下するを見よ—彼處には、其の星體を吸引し、また反拒する絕大力あるにあらずや。國家が其の大を致すを見よ—彼處には、其の全塊を膨脹せしむべき大潛勢力の存在することを認め得べし。此の力は卽ち國民の道德的品性なり。

今や年の新舊を分つ『時』の分水嶺に立ち、眼を轉じて舊歲を顧れば、吾人は我が歷史に對して感謝すべき多くの理由を有す。また新年を見れば心に其の多望を喜び、而して我が前に展開せらるゝ嗣業を繼ぐを得んが爲に、一層進步し發展を遂ぐるがため、確乎なる決心を祈り、我が膝自から跪く。

（三十九年一月）

生命の喜

往くところ、彷徨ふところ、吾人の側には物の美しきあり、喜ばしきあり。皆吾人の憂心忡々、人生の道を行くの時、吾人に追及し來り、吾人の肩を叩き、吾人に輝き、其の祝福もて、不用意なる吾人の靈魂に强ひんとす。然るに吾人は、呆然として之を省みざることあり、或はまた故らに之を斥くることあり。ア、愚なるかな、人や。

冬日所感

予は冬季の北地を見ざる既に十年、殆ど其の光景を忘る。寒風我が耳を吹かず、雪山の我が目を輝らさず。ホイツチアが『雪園（スノー、ボウンド）』の歌も、卷を蔽ひて、書架に横たはること爰に貳年。

予今再び北地の冬に來る。厲風は四肢を麻痺らせ、其の咆哮は予の耳を劈き、予が目を盲す。

されど冬の嵐には、筆舌及び難き美趣あり、純潔あり。周圍には皚々たる山岳あり、高峯は遙かに嚴峙して汚塵を交へず。河水は凝つて晶々たり、燦として美神の胸なる夜光珠の頸飾の如し。予は氷の大理石を敷ける道を行き、雪花の爛漫たる林を通じて、暫し冬の陰沈蕭殺を忘る。

生命あるものは皆休止せるが如し。草木は脂液流れず、野獸は蟄伏し、禽鳥は暖天に去る。されど人間は草木禽獸に勝りて、心裡に生命の躍如たるを覺ゆ。嚴冬の夜も血管の循行を妨げず、厲酷なる風も暖かき希望を枯らさず。

冬は吾人を呼んで働かしむ。活動のみ、能く吾人の身心に健康と悦喜とを與ふ。霜雪の季は嚴示す、『予の王國には、勉むるか、凍ゆるかの二途あ

るのみ。懶者は死すべく、勤勉勞作の人のみ生きん。汝其の一を擇べ』と。何の業もなきか、さらば木を伐れ、薪を拾へ、雪を掃け。汝の救は勞役に存す。活力と屈強なる性格とは北方の賜なり。此の性格は、狂嵐の鞭韃と雲中の幽獨とを凌ぎて健在す。

近世の文明は北方に産れて、其の養育するところとなり、南方は其の子孫に豐かなる食を與へ、思考の時を供す。

予は人間を以て全然天然の奴隷なりと看做さず。また彼を呼んで天然の掌にある傀儡なりとせず。彼が或は南方の太陽の陳ぬる食物を以て自己を養はんも、或る飽食の徒となりて鼓腹せんも、或はまた北方の命令に服從して覺醒勞役せんも、或は炬燵に蟄伏せんも、或は雪嵐の挑戰に抗せんも、或は之より遁逃せんも—その何れにもせよ、人は自から處決して行動せざるべからず。自主の人も、境遇の奴隷も、之を定むるものは天然にあらず

して、彼れ自己なり。

哲理は炎夏熱灼の地に榮ゆる能はざりしか。詩歌は曾て氷洲の寒谷、またスカンヂナビアの氷江を輝らさゞりしか。臺灣は永へに苦力の耕作に委棄せられ、樺太は汚穢なる漁業に放置せらるべき運命なりや。否！否！人は天然よりも大なり。彼は冬天を繋いで嵐車を驅り、彼は熱帶の苦熱を役して其の車を進むるを得ん。

（三十九年一月酒田）

平泉にて

我が足は、北上川と衣川との堤上、此の野原を彷徨ひ、我が心はまた死者と共なり。何すれぞ彼を死者なりといふ。彼等は生者よりもなほ生々として、人生の榮枯盛衰を吾人に語る。芭蕉吟じて、

夏草や、つはものどもが夢の跡。

といふも、予は風に靡く夏草が、唯つはものどもが功名手柄の遺物たるのみなるを信ぜず。彼等の勇敢なる行は、なほ吾人の有なり。

春

冬は過ぎたり、過ぎつゝあり。陰氣なる晝も、霜寒き夜も、枯枝に呻く風も、厚氷の河も、みな去れり。樂しき春は來れり、來りつゝあり。其の來るや、氷融け、水緩く流れ、風香を運び、黑金の土綠を生ぜり。自然の物はみな喜べり。鳥は歡迎を歌ひ、木は軟芽・新綠に悅を表す。梅雅やかに滿足を示し、鶯和して讚歌を奏す。大氣は最美の香と歌とに滿つ。

人は自然の忠實なる子なり、此の時、天地と悅樂を共にすべし。地は冬眠より醒め、爾今一年の長き務に還らんとす。人また起ちて働き、

新務に服せざるべからず。

吾人は血溫く脈管に流るゝを覺ゆ。胸は新しき活氣に鼓動するを感ず。新たなる精力は、我が全身を捉へたり。吾人は薄暗き室內に安坐するを得ず。世に出で、新鮮なる大氣の中に出でゆかざるべからず。

予は敢て青年の心が嬉戯遊樂に耽るを制せず。却つて彼等の活氣を喜ぶ。されど汝心せよ。罪惡にして有害なることのために、汝の精力を浪費するなかれ。

樂み長くして身體精神に益あるは、無邪氣なる類のものなり。罪ある樂みは、たゞ一時のみ。『一朝の樂みに、百年の憂を遺す』とも詩人はいへり。

春は到れり。日は一日と和らぎ人心を誘ふものます〳〵多からんとす。而して凡て美色の陰には、必ず禁路あり、吾人或は其方に誘はるゝこともあらん。

櫻の時は來りぬ。春風暖を加へ、鳥聲益ゝ繁し、いろ〳〵の花其の色を競ふ。而して青年また、情慾嗜慾のために、邪路に迷ふもの頗る多し。

春は短時日の間に、絕大の快樂を與へ、また長き悲痛と悔恨とのために無數の機會を備ふ。吾人は凡て春の甘樂を味ふべし。されど心して其の辛酸に變味すべきものを避けよ。

幻影

名譽てふ幻影。甚だしきかな、この幻影蠱惑して、吾人を危からしむることや。されど其の力たゞ能く吾人を誘ひて、荒涼たる孤峯の頂點に登らしむるに足り、更に多くは—然り最も多くは—遙かに此の高處を下りて遠き沼澤流沙の間に、吾人を委棄して喘々たらしむるのみ。

武士道の向上

武士道は傾斜緩き山なり。されど此處に彼處往々急峻なる地隙、また臨路なきにしもあらず。

此の山は、住人の種類によりて、ほゞ五帶に分つを得べし。麓に蝟がるものは、慓悍なる氣象と、不逞の體力とを有して、獸力に誇り、微憤にも之を試みんとする粗野漢なり。彼等は所謂『野猪武者』にして、戰時には軍隊の卒伍となり、平時には社會の亂民となる。

更に歩を轉ぜば、他の人種これに住へり。麓の森に住まへる者よりは一段進歩せる階級なり、獸力に荒まず。野猪族と異なり、殘虐を肆にせず、惡戲に耽らず。されどなほ其の有限の勢力を衒ふことを喜び、傲岸尊大、好んで子分を威壓し、威信を自覺し、人の服從を得て最も快とし、其の權力

侵害せられ、他の拘制を受くれば劇怒す。此は戰場に在りて勇敢なる下士となり、平時には厭ふべき俗吏となる。

此の類の住所よりも高く、更に一帶あり。其の住民は獸的にもあらず、傲慢にもあらず。多少の學問を好み、書を讀み―多くは經濟、法律の初歩を學び、而して大問題を喋々す。其の眼界は法律または政治の外に出でず。其の文學は三文小說と駄作詩歌とに限られ、科學は新聞紙上にて讀むものの以外に少しも留意せず。彼等の態度は、『野猪』級の粗傲と、次級者の峻嚴とを脫し、仲間には心安く、上級に窮屈に、下級者に威張る。彼等は眞武士道の新參者と稱すべく、其の數甚だ多し。彼等の中より軍隊の將校を出し、また事務官を出だす。

更に高き處一域あり。此處には武士中高級なるもの繁榮し、爰に軍隊の將軍と、日常生活に於ける思想行爲の指導者とあり。下級者には愛せられ

て、常に威嚴を保ち、上級には禮ありて、而も自尊を失はず。彼等が紳士的態度の皮下には、柔和も寧ろ多くの嚴格を存し、その信切には、同情よりも寧ろ多くの自覺的謙遜あり。その至高なる精神的態度は、愛情よりも寧ろ多くの憐愍を示す。彼等は汝に信切と聰明とを語り、汝は其の意を了解し、其の語を記す。されど彼等の聲は、汝等の心に生きて留らず。彼等の汝を見るとき、汝は其の視線の明透なるに愕く。されど其の爛々たる眼光は、彼れ去りて乍ち消ゆ。

汝は峻險崎嶇たる山徑を攀ぢ、最高帶に登りて、最高武士を見んと欲するか。此處に到りて汝を迎ふるものは、最も柔和なる種族にして、毫も軍人的ならず、その容貌態度殆ど婦人に類す。汝は彼等を見て、その武夫なるやを疑ふ。汝は一見、彼等を凡人視せん。彼等は尊大ならず、汝容易に彼等に近づくを得べし。彼等に對して勝手を振舞ひ得らるゝが故に近づき

易しと思ふべし、而も後に至り、其の引力に抗しかねて接近したることを覺るべし。彼等は貴賤、大小、老幼、賢愚の別なく共に交はり、態度の嫺雅優美なるは勿論、愛情その目に輝き、其の唇に震ふ。その來るや、薫風爽かに、その去るや、吾人が心裡の暖氣久しく存す。學を衒はずして敎へ、恩を加へずして護り、說かずして化し、助けずして補ひ、施さずして救ひ藥を與へずして癒し、論せずして信ぜしむ。彼等は小兒の如く戯れ且つ笑ふ。彼等の戯は、最も無邪氣にして、罪ある者を愧ぢしめ、その微笑は、萎えたる靈魂を蘇生す。その小供らしきは、罪ある良心をして純潔を羨望せしめ、泣かば、涙能く人世の重荷を除く。此の種の武夫の住する地帶は、即ち基督の徒と共なり。

分析

吾人が最初の心的作用は分解なり。　吾人の社交的生涯亦た之を以て始まる。吾人は 1+1=2 なるを知るに先だちて 2÷2=1 なるを知る。試みに幼童が菓子を分ち、または石彈（マーブル）を分つを見よ、其の勘定を誤ること稀なり。蓋し、斯の如きは吾人の頭腦が二葉より成り、吾人の手足が一對を成すといふ解剖的事實に原因するものか。

理由は暫く措き、吾人は思想の目的物を區別し、分解することゝなくして思索するを得ず。論理は反比矛盾を知るを以て始まり、分類とは、物を一定の標準によりて區別するに外ならず。

然るに吾人は分解を行ふに過ぎて、分解すべからざる物までも分解す。某に就いて語るや、吾人は彼が全人格を判定するに先だち、彼が智慧、彼

の身長、彼が德性、はた其の皮膚の色、彼が宗教心、頭の形等によりて、彼を片々に寸斷し、而して此等を分合して、天秤の皿に載せんとす。神に就いて語るとき、吾人は神は全一體なりと認むるもの〻如くに云ふと雖も、忽ち彼を三位に切り分ち、後、此等を總合して一體の神を組立つ―那計り能く之に奏效するかは、予之を知らず。―ア、吾人の神に對し、人に對して有する概念は、何ぞ夫れ錯雜なるや。

吾人は論理的能力の左右する所となり、教育の組織は悉く此等を養成せんが爲に備へらる。而して悲しいかな、知覺力―即ち物の全きを直覺する力、透觀する力、物の要質を捉ふる力は、大いに閑却せらる。吾人の教育は、眼鏡を磋り磨くを事とし、視力次策に弱きを致す。

自然の一片

雲雀啼く、沖天に歌ふ。予は其の歌、其の形を捉へんがため、目を張り、耳を欹つ。

傍に農家の少女七八歳なるあり、予を見、また空を仰ぐ。彼の何を聞き、何を見るかを問へば、答へて『何にも』といひ 、予に一瞥を與へたるまま、轉じて暮色裡に歩む。ア、不覺なり、少女、この少女も亦鳥の如く、唯だ是れ自然の一片なるを。

◎劍と筆

劍！幾多の赫々たる勳業、史的名譽、武勇の功績は、この一字によりて聯想せらる。此の字は、吾人をして往古ヨシユアが神のために劍を拔きし

ことを追憶せしめ、また劍によりて事を決せし希臘、羅馬の好戰時代より、最近の戰爭に至るまでを回想せしむ。劍は吾人の心をして、再びギデオン・ダビデ・アレキサンダー大王・シーザー・ピーター大帝及びナポレオン等の偉業を想起せしむ。昔話、傳說におけるも、正史に於けるも、寛仁、犧牲、正義、愛國の物語は、殆どみな劍の物語ならざるなし。劍は多く權威の表象なれど、更に多く悲劇殘忍を語る。汝の心試みに、暴虐に苦しめる窮民—年若くして屠られしもの—兄弟、夫、父、子を喪ひしもの—赤貧、裸々の遺族—此等數十萬の實例中より、その一を想ひ見よ。想像能く、流血の慘狀と、更に恐るべき詰果とに馳せなば、剛勇ウエリントン將軍すら、陣中の一夜、みづから戰場を巡りて、死者を思ひ、其の寡婦、孤兒を思ひて、同情の淚を注ぎしも、また敢て異とするに足らず。屠戮、飢餓は劍の妄用の後に隨ひ來る。飢饉は人口を滅じ、隨つて生産、商業、工藝、學問を妨げ、此等の休止に

よりて、文明もまた休止す。斯の如きは戰爭の誇張的觀察なるも、また其の論理的たるを失はず。劍は此の如し。國家の權力にして、また其の害毒なり。

筆に至りては、醒き罪より免れ、社會人心に注ぐに、高潔の氣を以てす。筆の一字は、小童も之を書するに容易にして、而して此の一字は咒文なり。これが傳ふる不可思議は何ぞ。シセロの宏大無邊なる才能も、その光彩陸離たる思藻も、―ジュベナルの枯殺的火焰も―デンテの型造的想像も―セルヴアンテスの滑稽も―ベーコンの理會力も、バットラーの頓智も―セキスピアの高邁、無礙の長所も―若し筆なかりせば、舛の下に置きたる燈火のごとく、能く見るを得ず、知るを得ざりしならん。盲ミルトン一たび筆に觸るれば、パラダイスの樂土を造り、其の善美を盡して、世界を驚異せしむ。筆の力は驚くべし。文明の進歩は汝の賜なり。科學は汝を讃歎し、文學は汝あるに由りて、生命を認めたり。『筆は劍よりも偉大なり』との古への格言は、良に故あり。されど筆にも濫用の害あり。筆は一時代の生命を後代に遺すと共に、また惡書の惡感化を不朽に傳ふ。筆は正しき主義を弘布すれども、之が爲し、また爲し得るところは、啻に爰に止まらずして、また有害なる著作の荼毒を撒布す。一利一害とは是なり。ダンテの『神曲』が啻にフロレンスの市の地下に於けるのみならず、また各人の足下に展開せる地獄の光景を描きて、深遠なる靈的眞理を教へ、セキスピアの戯曲が世界を富ませ、『ノヴアム、オルガスム』が哲學界に一變化を來し、『プリンシピア』が自然界の複雜なる問題を說明し、『天路歷程』と『失樂園』とが、各方面において、至大の善益をなしたりとせば、此等と相對して、かの虛言の庫たる『哲學字彙』とか、『道理の時代』とか、『十夜物語』其の他同種の書籍の相殺的結果は、等しく多大にして、而も時に一層多大なるものな

きにあらず。猥褻なる書籍の流布するは、多くの青年を毒す。不潔なる小說また戀愛物語は、徐々に而も確實に處女の心に危害な加ふ。アフリカの白蟻のごとく、表には何等の形跡の認むべきものあらずと雖も、其の實、道義、宗教、知識の眞髓を食み、其の犧牲が尙健全、安泰の觀ありて、而も墮落、破滅は忍び入る。筆は斯の如し。之を用ふる正しくば、國民の恩人となり、正しからずんば、其の仇敵となる。知るべし、『筆は劍よりも偉大なり』とは、水は火よりも有力なりといふと同樣の意味に於て眞理なるを。劍と筆との働きは相對的なり。その活動の範圍は全然異なり、一は物質的方面に働き、他は精神的方面に働く。

願望

予は日每の糧を祈る、されど貧者を忘るゝなからんため、富を祈らず。

予は强を祈る、されど弱きを輕んずるなからんため、力を祈らず。予は智慧を祈る、されど無學を賤しむるなからんため、學識を祈らず。予は淸き名を祈る、されど微賤を責むるなからんため、名聞を祈らず。予は心の平らぎを祈る、されど義務の聲を聞き謬るなからんため、閑を祈らず。

神よ、予は汝の門を叩きて、斯くの如きを希ふ。予もし入るを得ざるも、神よ、汝なほ其の食卓より落つるパンの屑を予に與へたまへ。

海上

門司を發して後、船はしきりに動搖し、號鐘、食事を報ずれども、食堂人影なし、予は止むなく斷食し、飢ゑ疲れて、昨夜を耽睡せり。

今朝眠より覺めて、予は新世界に來り、新感情は予に來れり。天候夜中

に變じて、海靜まり、蒼空燦として頭上に在り、鏡の如く滑かなる海は足下に在り。太洋の予をして天地創造の榮光を感ぜしめたること、未だ此の時の如きはあらず。航海の予をして人間發明力の勝利を感ぜしめたることも、亦この時の如きはあらず。彼の語―同樣の感情に伴ひて、常に予に來る彼の語―は予の唇頭に來りて、『ア、神よ、偉いなるかな汝の御業。汝は予をして此の地上に何を成さしめんとしたまふか』といふ。

予、手を伸ぶれども、地平線下に橫たはれるもの―否、我が腕丈より一寸の長きも捉ふるを得ず。予、目を張れども、人智より隱れたるものゝ影を捉ふる能はず。たゞ一全能者の『しるし』のみ、朧げに我が心眼に現じて、其の跡を追へば、此方には微々たり、彼方には昭々たり。

海は此の二特色の『しるし』を有す。其の茫漠たるは、予の知解を超越し、その深さは想像以上に深し。靜かなること、其の平穩に及ぶものなく、烈しきこと、其の怒濤に勝るものなし。予は海鷗の靜波に戲るゝを見たり、而して巨鯨の其の下に潛めるを想ふべし。老漁夫は一葉の舟に棹し、欣然、靜波に浮びて、少女と共に其の務に忙はしく、脚下、何の力、何の怪の爭闘するかに留意せず。

平和、戰爭、愛惜、惡憎、溫和、猛烈、此等は海を成し、此等はまた此の世界と人生とを成す。矛盾衝突は、有限なる予等の眼界に顯赫たり。されど―何處にか―神が創造の測計より深く、神の靈圖の階段よりも高くして、凡ての矛盾止み、衝突また存ぜざる所無くんばあらず。

矛、甲板に立ちて海面を望めば、心思彼此に彷徨す。されど注視更に密に、思索更に切なるを加ふるや、靈魂を困惑すべき凡ての感念は消散して、念裡唯一つ『神』てふ自覺を存す。

大帝國の墟址

予は過去の榮華の殘骸に立つ。側には王者の殿堂頽廢して累々たり。此の地は、昔政令一布、幾百萬の民衆を治むるの府なりき。嫉妬、隱謀、小説、享樂の國政を專にし、黃金、錦繡に輝きし后妃の後宮も、佛教、儒教、道教等、幾多大宗教の神物鎭在して祭祀を享けたりける殿堂も、幾千年間、古人の智慧を藏して、神聖なる畏敬と、盲昧なる尊重とを受けたる書庫も—此等宏壯なる大厦は、今や擧りておのがじし頽壞せり。蟲の既に中心を食みたる柱に、脆く凭りて將に傾かんとすあり、屋上の碎瓦に座せられて、將に覆らんとするあり、既に倒壞して、たゞ一堆の塵丘を成し、大樹之に生じ、欝綠、行人を蔽ひて、炎威を遮ぎるあり。保存最も宜しきを得たるも、なほ其の壯嚴なる屋上、雜草、矮小樹離々として茂生し、屋内は小禽、

蝙蝠の安居となる。

支那現朝の宗廟のみ、啻に然るにあらず、其の權勢の發祥、興隆の地たる奉天の靈都も、また擧りて廢頽せり。外壁は土塊に還るに忙はしく、曩には難攻不落の石疊たりし內壁も、今や破壞の狀を呈し、櫓樓、城門、蔽ふに屋なく、行人をして、うたゝ瓦片石塊の墜落を憂へしむ。

大宮人は既に宮殿の廓廓、磚路に蝟らず。府內の民は依然として、傳來の商賣を營み、買ふあり、賣るあり、値切り倒すあり、路上に商ふあり。王侯去りて庶民を留め、彼等舊に依つて生を送り、『嫁り、娶り』、營々として祖先の道を步めり。

斯の國政府は腐敗其の極に達す。されど人民には烈々の熱火あり、絕大の活氣あり。史を繙いて、未だ斯の國よりも重んずべくして、而も之より倘甚だしき惡政の下に破壞せられしものあるを見ず。玆には治者と被治者

と殆ど融和せず、恰も油と水とを合するとき、輕き脂肪は浮びて、重き液體を壓するの狀あり。水は上より壓せらるゝも、容易に之に耐へて、毫も壓力を受けざるものゝ如くに流動す。

斯の國の民が、無用の負擔を厭ふの時は來りつゝあり。政府が腐敗の價の貴きを知るの時は來りつゝあり。

予は廢墟、荒址の間に立ちて考慮に耽るとき、槌、斧、鋸の響の予を覺醒するあり。見よ、大工、左官は忽忙として各自の業に勵み、廢都の亂離せる堆圮を舊狀に復さんとす。往時の榮華は、奴隷または苦力の手に由らずして自由にして善き勞銀を受くる工人の手に由つて回復せらるべきなり。而して其の業了る時、冀くは暴君帝位に坐せず、邪淫の皇后その宮園を汚さず、佞臣また、廟堂を干さゞらんことを。（明治三十九年五月奉天）

半夜

饂飩屋はみな臥戸に歸れり。蟲聲は靜まれり。今夜、郭公啼いて詩人の夢を破ることなく、不祥なる夜鴉の聲、薄幸の人の眠を妨げず。大地は我が耳に、死の如く善し。予孤座して、星の『太古の空に昇る』を見る。予何ぞ、星宿行雲の韻律を捉ふる能はざる。冀はくは、微かにも、得てその調べを聞かんことを。然るに予はたゞ我が小胸の鼓動を聞く。

遠き善を求めて、喘ぎつゝ思を寄す、
靈魂の烈しき動悸と切なる憧憬。

支那は孔子の國か

予、支那に遊んで、『是れ孔孟の國なるか』との疑問、切りに念裡を來往

し、此の第一問は、また他問を伴起して曰はく、『此の國政府は、彼の聖人の教訓の精神的成實なりや』。『此の國民は、彼の聖人の敎へし主義の論理的結果なりや』と。

斯の國、斯の民は、果して孔敎の産物なるか。予は曾て斯の人を尊崇せしことを悲む。

腐敗の陰顯此の國政を蠱毒する、何ぞそれ甚しき。賤者政令を四億の民衆に布く、何ぞ斯の如き。不義が不義の名に於て、不義を同胞に行ふこと、何ぞ此に至る。政治の形は、みな憎惡すべく、失望すべきものを以て滿てり。

此の狀情の根柢は、政府の組織よりも古く、爲政者の精神よりも深くして、卽ち孔子の敎訓に存す。孔夫子の教訓說法は皆生氣に乏しくして、人心を動かすに足らず。彼は權威なき人の如く語れり。孔子は恰も平地より

もやゝ高き路傍の演壇に立ち、朗々の美聲を以て、千百の行人に語る者の如し。淸き同情と、眞の愛情とに缺けたる、多くの巧言美辭が勞苦の民における、蓋し馬耳に念佛のみ。

故に敎者と聞者との間に、多大の懸隔あり。彼の高大なる音聲に耳を傾くる者は、彼が眞意を解すること少く、たゞ漠然として彼が莊重なる辭令の奧に、何ものかの潛むべきを感ず。冷々として聰明なる支那人の孔夫子は、儀あり、容あり、嚴にして正且つ義、而して簡潔なる言語を以て實踐の德を說く。此の師、笛を吹いて、民乃ち踊る―而も甚だ陋劣。彼悲しみて、民泣く―而も鰐魚の涙なり。

予は感ず、孔夫子の使命の失敗に歸したることを。其の言は、其の國民中、敎ある者之を解し、智ある者之に通ずるも、遂に能く彼等をして罪を悔い、責任を感ぜしむる能はず。幾億無學の從に至りては、孔子を見るこ

と唯だ朦朧たる一人格のみ。而して彼は其の朦朧たる想像裡に實在せず。彼が縷々滔々千百の金言を說くものなるを知るりて、その敎を實行するもの無し。

（三十九年五月奉天）

日本の發達

我が若き國家の發達は、近次その甚だ迅速なるを見る。人口獨り然るのみならず、領土も亦然り。啻に產業と富力とのみならず、知識、實力共に亦然り。

顧みるに明治天皇登極の初に方りては、琉球なほ明かに其の領有し給ふところにあらざりき。樺太の國境は確定せず、臺灣に對しては、吾人は何の要求するところなく、朝鮮は固より自主の國たり、遼東半島の支配權のごときは、吾人の夢想せざるところなりき。

人口よりいへば明治の初年に於て、吾人は僅に三千五百萬を算するに過ぎざりしに、今や五千萬を越ゆ。四十年前の北海道は、極めて少數の內地人之に住し、其の地は忌むべき蝦夷の稱あり、人之を見る、極寒にして猛獸の害多き一島なるを以てせり。然るに今や北海道は、東京より二日程にあり、其の地、今やアイヌ人の小屋を見ること稀なり。

熊狼の類に至りては、其の產地にても、恐らく之を見るを得ざるべし、野獸の巢窟は、耕されて田畑となり、曾て其の跋扈跳梁に委したりし處に、今や人間の兒女の戲るゝを見る。二十年の昔、狼餓に吼え、熊怒り哮るを聞ける處、今や學校唱歌の樂しき調べを聞く。かく墳墓の地遠く、我が同胞同族と相會するは、啻に北海道に於て然るのみならず。また神戶より汽船に搭じて、三日の航程を往かんには、古へ蓬萊の高砂島と言ひ傳へ語り傳へられし、日本の新領土に上陸すべし。これ卽ち葡萄牙人が、その洵美な

るを賞して、呼ぶに美島（フォルモサ）の名を以てせる臺灣なり。此の地熱帶に近く、氣候おのづから甚だ温暖に、其の北海道に異なるところ多きも、此地また我が民族の盛に繁殖する處となる。北海の枝廣き楡の下も、南海の幹高き椰子の蔭も、共に日本人小兒の生育に甚だ適好なり。

曩に島國內に幽閉せられし大和民族の生活は、過ぐる數ヶ月の間に、大陸的色彩を帶ぶるに至れり。一年半以前、日本帝國の一百萬赤子は、國家の權利を防衞せんがために、旗鼓堂々滿洲の野に進擊せり。而して戰既に終を告ぐるや、異種人との戰に武裝するにあらず、反つて鋤を捉り、算盤を携へ、劍銃に由るよりも、更に永續すべき勝利を獲んがために踵を接して、大陸の地に進入しつゝあり。

たゞ人口領土增大するも、伴ふに富と知識との發達を以てせずんば、甚だ無意味なり。日本は此の點に於て、幾許の事を成し得たるか。日本は放

埒なる目的のために、其の富を浪費して、一層貧弱を致せるか。我が國は新たに領土を得、また人口の增加したるを誇りて、更に高尙なる任務に務むることを忘れたるか。

我が國の富力が、多大の速力を以て增進したることは、多くの事實之を證明す。晩近四十年間に開發せられたる金坑、炭坑其の他の鑛坑を算へ上ぐるの要なし。鐵道日々新たに敷設せらるゝは、皆人見るが如し。また年年數千町步の荒地、林地は、新たに開墾せられて耕地となる。海運も、また他國に比類なき大進步をなせり。新船は絕えず外國より購入せられ、新艦は自國の船渠に於て建造せらる。而も露國の寛大なる、我に贈るに數雙の軍艦を以てせり。

吾人は富力昔日に倍增したるを喜ぶ。されど富は用途正しからざれば無益なり。富家の不埒なる息子は、金の自由になるまゝに、敗德無恥の道樂

者となること少からず。國もまた其の富力却つて國家最善の利益を害することあり。吾人は如何に善く金を使用すべきかを知らざるべからず。教育、學問、知識は勿論、加ふるに確實なる判斷と正直なる心操とは、吾人に教ふるに、富を善用すべき道を以てせん。

吾人が國家として到達したる經過を顧みるにあたり、學校の設立、兒童の就學、高等學校及び大學より出づる卒業生、書籍、雜誌、新聞の發行、科學上の發見、機械の新發明等の比年增加することの如くに、また吾人を悅喜せしむるものあらず。

日本が成せる最近の發達は、吾人をして自負自信せしむるに足るものあり。然りと雖も自負自信が增長せば、やがて衰運を招き、沒落を免れざるを以て、吾人は常に心を爰に用ひざるべからず。吾人は缺點短所を自覺すべく、また幾許の點に於て、なほ西洋に劣るかを認知すべきなり。請ふ、

吾人をして、既に成就し得たるものを感謝せしめよ。また請ふ、吾人をして、感謝の情を以て、急がず、休まず、なほ眼前に橫たはる長途を步まんがため、自ら備ふる所あらしめよ。

修養と拘制

人惡を好みて之を爲すの傾向あるは、固より明白なる事實にして、これが左證を擧ぐるなでもなし。若しこの性癖を制遏するにあらずんば、我等が如何なる結果に到着すべきかは、これまた言ふまでもなし。深遠なる知的內省の人にして、偉大なる靈的經驗の人たりし使徒ポーロも曾て曰はく、『われ願ふところの善は之を行はず、反りて願はざるところの惡は、之を行へり』と。

我等が心の畑に害草の發芽するや否や、直ちに之を芟除するため、絕え

ず之に務むべく、若し然らずんば、其の害草は見る〳〵發育し、忽ち益草にまさりて成長するのみならず、遂には之を蔽ひて全く滅絶せしむべし。

聖人賢者の多くは、人の天性に存する肉的分子を抑壓せんがために煩悶し、就中、最も不健全なるものは、其の『自然人』—即ち基督教に改宗せざるもの—と稱するものを目して、自ら贖罪の機を有することなきものなりといふに至れり。ゆゑに彼等は肉を制壓するは、即ち靈の發達を來す所以なるを信じて、自制と往々苦行とを敎へ、且つ之を實行せり。

此等の訓戒と實行とは明かに、吾人の日常生活に必要なるも、此にも自から其の適當なる範圍ありて、之を越ゆるときは、利よりも害を生ずること多し。肉體の快樂には危險あり、されば之を樂しむために守るべき程度あり。程度以下なれば害なく、却つて益をなし、遇ぐれは身體と靈魂とを殺す。

吾人若し飽くまで靈の果を味はんとせば、肉の樂を忘れざるべからず。禁慾と犧牲となくば、何等生命の深祕を覺るを得ず。カーライルは自我に死するを以て、『道德的行爲の第一楷梯』と稱す。自制は其の生命の始なり。我慾は眞の生命にあらず。凡そ健全なる生命の特徵は、自ら不朽なるを得ると共に、其の同類を繁殖し、他に分つに活力を以てすることなり。之に反し、我慾は靈性を殺傷し、自己にのみ終始す。

然るに吾人はまた自我が全く害物にあらざることを知らざるべからず。吾人の心は、高尚なる因素、神性の本質及び天の光明を宿す。友徒（クエカー）の敎祖ジョージ、フォックスは、之を稱して『種（シード）』といへり。蓋し生長の力—實を結ぶと多き大木に生長するの力ある善德の種子の謂なり。貧者を見ば、憐愍の情覺えず胸に湧き、偉人、貞女の高潔なる行爲を見ば、讃嘆自から禁ぜず。欲するも欲せざるも、眞なる事正しき事、義なる事、潔

き事、愛すべき事、嘉みすべき事は、その何事にも敬意を表す。人は本來、義と愛との觀念を有し、愛の心と正しきを知るの心とを以て生る。孟子の曰へる如く、孺子の將に井に入らんとするの危きを見ば、人誰か走せて之を救はざらんや。冷酷なる殺人者が、赤兒の匍ひ寄るを見て、氷の刄を鞘に收めたる例も少からず。同情てふ神聖なる本能の根ざしは深くして、吾人の天性より拔き去るべからず。是れ吾人の大自我に屬する一要素なり。

然るに人の天性に何等高尙なるものゝ存在せるを否定するもの少しとせず。其の主張によれば、人はたゞ蟲螻、塵芥同樣にして、たま〱神々しき靈光一閃すとも、これは由來彼に屬するものにあらずとす。かゝる者の目に映ずる人は、賤陋、有害にして、禽獸にだも如かざるものなり。

こゝに道德感念の由來を論究するは、予の目的にあらず。この感念は高くまた遠きより來りたるべし。其の何處より來りしにもせよ、吾人は道德感念がこゝに生々として現存し、各箇の良心裡の至聖所に崇めらるゝを知る。吾人は此の神聖なる本能を涵養するために、其の善を盡さゞるべからず。是は弱き草木のごとし、最も周密なる注意を以て保育せられずんばあるべからず。其の草木もし適當なる培養を受けば、則ち生長繁茂して、亭亭たる喬木となり、大空を蔽ふ枝葉の蔭に、人も獸も宿を借るべし。この貴重なる感念は、吾人が自我の一部を成すがゆゑに、吾人の生長すると共に生長し、吾人の頽廢すると共に頽廢せざるべからず。また吾人は之が生長と共に生長し、其の頽廢と共に頽廢せん。此の感念にして死せば、吾人もまた死し、たとひ鼻孔の呼吸は持續するも、既に靈性に生きず。

故に吾人の心には二種の天性の宿るあり。二個の主義は、吾人の心を戰場として、互に相爭鬪しつゝあり。一は惡なり、其の强きこと、勢を恣にし、やゝもすれば吾人を征服せんとす。他は善なり、その弱きこと、保育

なくんば生長するを得ず。

惡に抵抗する行爲を稱して、拘束、自己犧牲、禁慾、自制といひ、哲學より見れは、ストア主義となり、宗教より見れば、遁世主義となる。而して此等に對する教誡は、猶太人がモーゼの律法を本として、之を說き且つ行ふこと最も嚴格なるが故に、之を稱してまた猶太主義(ヘブライズム)ともいふ。

以上に反して、善性の成長を勸むる行爲あり。之を唱ふる者は曰はく、『汝の自我を發揮せよ。汝の性能を增大せよ。すべて汝が生來の能力に與ふるに自由の活動を以てせよ』と。之を稱して修養といひ、自己表明といふ。その希臘に於て最も著しく現はれたる故に、希臘主義(ヘレニズム)と稱せらる。

二者ともに功德もあれは、危險もあり。二つながら道德的進化の工夫に缺くべからずして、相互に背反するものにあらず。二者は唇齒輔車のごとし。適當なる一致を得るによりて、始めて中庸の道を得ん。

墓地

墓地をさまよふ。時は旣に其の子孫が、功名不朽の野心を嘲り、碎くる石の面より彼等の名を拭ひ、また之を沓の下に埋めて、毫も假借ぜず。名は何ぞ。譽は何ぞ。

人此の世にありて正義と慈悲との名に於て成せる業のみ、地下の巡禮に就くに臨みて、身後に遺すを得る、唯一無窮の記念なり。『人生の嚴かなる海を渡りゆく』人々を誡めんがために、血流るゝ指もて岩に印せる、いと微かなる爪痕、はたまた迷路の旅人を導かんがために、砂上に遺せし、有るか無きかの足跡よ、—かの驕慢の手もて大理石に刻める稱號、碑文は皆消ゆべし、されど此等は遂に滅ぶることなし。

現在の責任

君よ、今は歴史上いかに雄大にして、而もいかに危急の場合に立つかを眞面目に考へ、または深甚に感じたりや。吾人は往々、現在を忘れて、過去を慕ひ、未來に憧るゝものなり。

我等は前と後とを望み、
無きを思ひ煩ふ。

謂はゆる黄金時代は、吾人の自作なり。時代は、金にもあらず、鉛にもあらず、その何れになすかは、吾人の思想と行爲とに由る。吾人の所思崇高にして、所爲高潔ならば、如何なる時世をも、黄金時代となすを得ん。卑劣なる思想と下賤なる行爲とは、最善の日月に汚辱を來す。希臘神話のミダス神は、一たび其の手を觸るゝ物は、何物をも直ちに變じて黄金とな

なすの魔力を有したりといふ。吾人もまた此の種の力を有し、欲するまゝに、今の時代を化して黄金時代となすを得べし。

支那の古賢は、人多く耳を重んずるに過ぎて、目を輕んずといへり。吾人は過去の出來事のごとく、耳に聞き傳ふることを重大なりと思考して、日常の事件のごとく、現に自己の目を以て視ることに對しては、適當なる注意を拂ふことを怠る。

吾人が第一の務は、生ける時代、即ちエマソンが『永遠の現在』と稱するものゝ要求するところに思慮を運ぶことなり。

吾人は過去二十ケ月の間に起りし重大事件を回顧し、また來るべき歳月に於て生ずべき無限大の事柄を豫想するに當り、衷心切に自ら生きて今日に會ふを快とするものにあらずや。吾人の脣は、安んぞ、吾人の賦與せられたる義務を讃へ、また之を感謝するの辭を禁ずるを得んや。

年少の友よ。現在よりも大なる未來は、汝が現在の努力の結果を待てり。祖先の功績は、汝を促して、今日の事業に邁往せしめ、現在は聲高く汝の熱實なる勤勞を求む。ゲーテ敎ふらく、『現在は權勢ある神物なり。汝自ら其の力を熟知することを學べ』と。現在の力を知るには、唯一つの道あり。卽ち其の命令に從ひ、其の責任を盡すことなり。

其の手能く今日の務を行ふ人は幸福なり、賢明なり。

（三十九年）

沈默の時

予が青年に勸めんとする一事は、毎日の或る時間を全く沈默に捧ぐるの習慣を作らんことなり。眞なるかな、カーライルの言や、『密蜂は暗處にあらざれば働かず。思想は沈默に由らざれば働かず』と。吾人が最も能く自己を知るを得るは、沈默の時に於てなり。人が時に自ら其の靈性と語るは

甚だ善し。吾人は毎日十分或は十五分なりとも、退いて暫く沈默を嚴守するを以て規則とすべきなり。

吾人は固より會心の靈性と友たるは、其の大いに快とするところなり。されど友情の中にも、自己の靈性との交ばかり、有益にして持續すべきものあらず。擾々の世界より門戶を鎖ざし、襖を締め、家人を遠ざけ、而して自己の靈と語れ。『此は正しきか』『彼は誤れるか』『我は正直なりや』『我が心は誠實なりや』などと問へ。さらば汝の靈は、汝に適切なる答を與ふべし。

ソクラテスは、一事を爲さんとするに先だち、また一事を終りたる後に於て、彼が稱してデモン（鬼神）といへる其の靈と議るを常としたり。吾人の靈魂には、吾人を或は宥し、或は罰する一つの力宿りて活動す。この力働かずば、吾人は全く闇黑となる。聖書には神を稱して、『世に來る凡ての

者を照らす光』といへり。

この力は生長の能力あるがゆゑに、ジョージ、フォックスはこれを『種』と稱せり。彼および彼の信徒は、また之を『內心の光』といへり。

王陽明は之を良知、良能と稱へ、我が國の陽明學者三輪執齋は、之に與ふるに、人心に宿れる天神の光明の名を以てするに躕躇せざりき。

斯の如く之に種々の異名あるも、其の意味は同一なり。然るに此の絕大なる力は、しば／＼吾人の裡に隱れて抑壓せらるゝことあり。吾人は之が培養に十分なる注意を拂はざるために、其の力を現はすに適當なる機會を得る能はず。吾人は其の聲を無みする傾向あり。其の聲高くとも、吾人は之に留意せず。吾人に與ふるに、最善の訓戒忠言を以てすることあるも、吾人の耳は他の音聲のために騷がされ、または妙なる音樂のために惑はるるため、此等に聽くことなし。

されば吾人が時々心の門戶を鎖ぢて、世塵と隔たり、而してデモンが祕密會に於てのみ、吾人に語るところに耳を傾くるを甚だ宜しとす。

神々と共に

我等は暗淡たる千年の樹蔭を步む。仰げば蒼穹の、たゞ鬱々たる綠葉を點綴するを見る。

我等は恐惶として、山田の靈境を行く。予等は聲を潛めて語らず、また語るともたゞ耳語す。神殿の奏樂も、參詣人の誦唱も、悠々として廣前を徨ひ、または亭々たる老杉に止まる鷄の聲も、此の靜謐を亂さず。唯この五十鈴の流、幾日かの雨に層增して、逆卷く水音の風に傳はるのみ。

百物みな過去を暗示す。予は時粧を恥づ、革靴は神を瀆すを畏る——予は裸足か、少くも草履を穿つべきなり。羅紗帽の不釣合は笑ふべし。一枚

の歟多は、予の頭を蔽ふに足るべし。モーニングを着、ヅボンを穿ちて此に來るは、恐るべき瀆神の罪を犯すものゝ如し――荒妙の衣こそ我が肌を蔽ふに宜しけれ。

されど神々は、予が其の子なるを知る。巴里風のフロックコートも、社會學の最新學説も、神々が予の父祖たる事實を湮滅する能はず。然り、神威を壞り、神の存在を疑ふ、彼の極端の外道と雖も――予にして若しこの種の説を取らんにも――神と予とを離間するの因をなさず。また神々はたとひ予が已の子なることを否まんとすとも、予は神々より傳へられたる相續權を主張して、凡ての人類と神とに向つて我が要求を訴へん。

新日本は庶出にあらず。彼女は有史前日本の嫡出なり。日毎に咲き出づる花は、世々に亙りて積り成せる腐土の育成するところなり。

原始的日本は過去に屬す、神々もまた然り。舊きは去りて、智慧を新しき

に傳ふべく、舊制度は秩序を新制度に與へて消亡せざるべからず。時代は其の來る毎に、おの／＼其の新たなる責任を有し、吾人の祖先は、吾人に與ふるに、常に此の責任に適ひたる清新少壯の精神を以てす。死せる過去を慕ふは無益なり。若し過去にして愛すべくば、吾人をして、生ける過去を念はしめよ――生々として現存し、現在よりも久しく存留すべき過去は、卽ち不滅永遠なり。過去は吾人を苦しむるの重荷ならず、吾人の手足を結ぶの羈束ならず。

敬ふべき過去を以て新刺激とし、吾人を促進するの刺激とせよ。祖先の聲は、吾人を誘いて、新事物、新行爲に就かしむべし。舊きは吾人を新しきに呼ぶ。地の神は、吾人を天の神に導く。吾の目は、一の存在より他の存在に高まり、苔蒸す老樹の繁き葉蔭を通じて、杳々たる彼蒼を仰ぐ。

我等の間に英雄なし

我國民的心理には憐むべき一癖あり。卽ち我が國の老少に著しき、コセコセして、すねて、惡口好きの性なり、他の過失を發きて、之を誇大するを好む。無益なる批評は、愚者、小人の特色なり、彼等は過失以外に何物をも見るを得ざるが故に、自己は過失そのものなり。獨逸の諺に、『馬鹿者は過を見るを得て、善をなすを妨げらる』といへり。彼等は何物にも感服するは、威嚴を落すものと思ひ、肉の大、形の善を解せず。

我等の間には英雄を容れず。我等は英雄國たるを誇る。英雄の中に、英雄あり能はざるか。英雄を造るものは、英雄ならざるか、一人の英雄なき國は、必ずや英雄國たるを得ず。

同窓の久誼

山河曾て我れに新たなる時ありき、然るに時旣に過ぎて、山河なほ存す。少年の記憶は、夏の夜の樂しき夢の如くに還り來る。されど當年の經驗は深く我が靈魂に印せられ、今の予は、彼の日に感じ、思ひ、また爲したるものと大差なし。

昔、予は優れし靈性と交を結びたり。爾來日月は、過去の闇に移りたりと雖も、友人の熱情と信實とは、毫も渝ること無し。予等は少年の日、肱を交へて講堂に學びたり。而して今や各〻世路を異にすと雖も、『我等を基督の愛に結ぶ惠の絲』はなほ强し、

我等が青年時代の談話には、解謔を交ふること多かりしと雖も、我等は熱心にして、眞面目なりき。予等はしばしば上野公園の鐘樓（爰にては入

場料を要せざりしが故）の邊に會合し、白幕樹蔭に踞りて、大膽に而も眞面目に、哲學者も恐縮すべき大問題を捉へて、意見を交換したり。

人生の最大結果、人間の最高目的、靈魂不滅の如きを討論し、何等の決着を見ずと雖も、なほ予等の思想を陳腐狹隘なる範圍外に廣げたり。辯論の間、吾人は草上に廣げたる炙豆煎餅の大馳走を飽食したり。予等の集會所また勉學所として愛好せし巣窟は、舊聖堂內の圖書館なりき。これ當時唯一の圖書館にして、吾人の目には其の建物が如何にも宏壯に見えたり。入口の甃石は堅固にして瀟洒たり。室內は靜謐にして、涼風吹き入り、窓外、百日紅に鳴く蟬のみ、吾人をして三伏の苦熱に在るを覺えしめたり。

思を轉じて、彼の昔を顧みれば、不老の泉に飲するが如き感想は、必ずや予が心に生じ、他の記憶の與ふるを得ざる一種異樣の感想を催す。誠實なる少年の交と、意氣投合せる同窓の友誼とには魔力ありて、ゴビの砂漠を

化して、エルドラドの黃金となし、平凡なる過去を變じて、光榮ある歷史となす。嗚呼友よ！予は青年時代の舊巣に歸り來り、手を伸べ、三十年の幾月を隔てゝ、君の手を握らんとす。我等は各々世路を異にす。勇敢なる鑑よ！汝の手は何すれぞ痩せて、戰けるや！其の手は多年の奮鬪を記す。汝の戰――汝が靈魂至奧の內戰、汝の信仰を嘲けるものとの戰を善く戰ひけり。また汝愛する金よ！汝は孜々兀々として、曾て擇びし路を歩み、而して汝が少年時代の夢想は、成人の日に至りて之を成就せり。汝の學は其の名に冠するに名譽を以てし、汝の名は科學の宮殿に銘せらる。また汝、勇よ！汝は多能と大量とを以て、暫く人智の野に彷徨せしも、一旦其の生涯の業を決するや、牢として之に任じ、啻に我が祖國のみならず、また廣き世界は、汝の善と、汝の能とを認む。

ア、我讀者よ、我を宥せ！予は過去を夢みつゝあり。斯くの如きは我が

青年時代の境遇に歸り來るに於て、蓋し已むを得ざらんか。百日紅の樹下に坐して、囂しき蟬が昔日の歌を誦するを聞き、また少年の樂しげに群を成して、眞面目なる談話を交へつゝ過ぎ往くを見るや、我が學窓の日は、螢が夜の闇を破り、欣然として輕飛するが如くに、明煌々として過去より現在に映射す。

學生の移住

新學年また來り、數萬の青年男女學生は、再び東京に集まりて、各ミ其學校に歸る。汽車は、海濱より、山間より、數百の學生を載せ來る。彼等は中宵燈油の臭を遠き林間に棄て、蒼白の顏色を太洋の波浪に洗ひたり。而して今や講堂、寄宿舍に携へ歸るものは、松林鬱々たる山岳の健全なる芳香なり、海氣の鹹味なり。田舍の血液を運んで、大都の中央に歸るもの

なり。都會に在りては、多少汚瀆せられたる天然も、青年男女により、滾滾たる流を成して再び溢る、

人命統計の説明する所によれば、都會の生命は、絶えず田舍人によりて更新せられ、充實せらると。赤毛布、田舍漢の移住なかりせば、世界の都會はみな夙に荒涼たる墳墓と變じたりけん。國家をして生々たらしむるものは、田舍の血液なり。

さりながら學生諸君は、新たに獲得したる活氣を得て、何の處にか之を適用せんとするものぞ。體力は人間存在の一小部分に過ぎず。實に生命の基礎なりと雖も、その上に築かれしものは、修養の進歩と共に、其の量と價とに增大し、是に於て健康は終極の目的にあらずして、ただ何等かの高遠なる標的に達するが爲の方便なることの認識せらるゝに至る。

ギツヂングス教授は人間を體力、心力、徳性及び社交性の四個の階級に

分類せり、體力のみ人格を全うするにあらず。之が價値は、人生の高尙なる目的を成就するに際して、その力を借すことの多少によりて量らる。

今日の重大なる問題は、靑年男女が都會に輻湊することなり。吾人は彼等に對つて問はん——諸君は夏日の山村水廓より齎し來れる、更新せる精力、堅固なる感情、振起せる勇氣、爽新なる意力を用ひて、果して何をか成んとするものぞと。諸君は之を用ひて、小にしては都府の生命、大にしては國家の生命を高めんとするものなるか。はたまた諸君は遊蕩に流れ、肆行に耽りて、之を消盡せんとするものなるか。

都會は善と惡との大機會を具して諸君を俟つ。日本國の最大惠福は諸君の爲に供へられたり。諸君は我國の有せる最良の圖書館に入り、日本の與ふる最良の教師に就きて、學問を修むるに遺憾なかるべく、また之に反し、最醜の快樂、最惡の遊興に一身を委ねて、生涯を懶惰に送ることを得べし。

諸君は故山を去るに臨みて、高潔なる生涯を送り、光明ある世路を歩むべしと決心したり。日と共に起き、冷水に浴し、朝の運動をなし、而して明晰なる頭腦と、純潔なる精神とを以て、日課に就かんことは、諸君の決心なりき。諸君の眼前には、宏大なる講堂裡に、野心勃々たる青年が、熱心に著名なる學者の說を聞くの狀を描きたり。また夜半、一小室內に籠居して、机に凭り、科學、哲學、歷史の神祕不可思議を討究するの狀を思ひ浮べたり。諸君の想像はまた轉じて、品性善良なる人と新たに交を結ばんことを欲したり。諸君が學生生活の理想は高尙にして純潔なりき。乞ふ、諸君は一生これを以て前進せんことを。乞ふ、誘惑の陷るゝところとなりて、決心の途より離れしめらるゝなかれ。また乞ふ、諸君が其の身を獻じて、高遠なる目的に供するを得んことを。

男女學生は毅然として立つべし、多大の誘惑は到處に陰現す。每朝『我

等の糧を今日も與へ給へ』と祈りて、靈性の糧を求むるにあらずんば、容易に彼等の餌となるべし。理想は一つづゝ消え、精力は緩み、決心は鈍らん。先に厭ひしものも、後には敢て棄てざるに至り、先に唾棄せしものも、漸次之と親しみ、先には一見その害惡を認知するを得たるものも、後には之に愛好すべき點あるが如く思考し、善良なる本能の深く嫌忌せしものも、後には却つて敬服の目的物たるに至らん。若し良心の光明にして曇らんには、宮殿は潰されて牢獄となり、牢獄は崇められて宮殿となり、妖魔は天使と變じ、天使は妖魔と化せん。斯く是非の力の轉倒するは、平和なる田舍を去りて、繁忙なる都會に入り、其の身邊の境遇を異にする青年者流に就いて往々之を見る。然るにたゞ田舍の安居より齎し來りたる、堅固なる意志、健全なる身體、常に祈る心、純潔なる精神、此等のみ能く青年を武裝せしめ、毅然として無數の罪惡の狂惑に反抗するを得しむべし。

快活

偉大なる心は、常に快活なり。彼は薄弱なる兄弟をして苦悶せしむべき程の重荷を負ふ時も、しば〳〵彼に逼り來る淋しさの中にも、懦夫をして畏縮せしむべき熱烈なる戰鬪の間にも、彼は常に快活なり。

凡庸の靈魂ならば、當然不平を起すべき境遇も、曾て平衡その宜しきを得たる心の安靜と沈着とを攪亂することなし。その心は常に快活なり。

その人は悲哀を嘲らざるも、悲哀のために平心を奪はることなく、決して不興ならず。大なる靈魂が往々淋しさに包まるゝは事實なれども、また病的にして矮小なる精神が、陰氣に陷るの傾あるは一層多き事實なり。心小なればなるほどに、容易に飛雲の一小片にも蔽ひ陰さる。

善人は、獨り淋しくこの大地を行くも、其の中自から喜あり、また友あ

り。友と語る如くに、潺々たる溪流と語り、蜂の聲にも、稻葉の戰ぐにも、之より讃美の歌を聞く。派手なる櫻も、地味なる萩も、ひとしく彼が最愛の友なり。

眞に高尙なる靈魂は、自然の使命を覺り、幾多の天災の生ずる禍害を憂とせず。彼の思想は災厄を超越し、たゞ之が來るとき、其の手は罹災者を救恤する爲に多忙なり。

快活なるは、愛情ある心の一特色なり。人若し其の心が愛念に溢れ、愛念を以て、周圍にある凡ての物を活かすものならんには、たとひ快活ならざらんとすとも得ず。かゝる人は無上の幸福を享けたる人なり。愛は滿身より湧き出で、滾々として盡きざる泉となり、幾十萬の人ほしいまゝに之に飮することを得ん。

眞に活動の人は愉快に滿てり。彼は陰氣なる豫想または不快なる恐怖に

借すべきの時を有せず。ダモクリーズの劍が頭上に懸りをらんも、彼は戰慄せず。彼は其の生命が危害の保險を有せるを知り、高尙なる行爲と高尙なる思想とを保險料として、天に支拂ふ。

思へ、薔薇より刺を切り去らば如何。苦痛なく、刺痛なき悲哀は、大能の御手にありて、人間を高むるための力となる。この故に悲哀の崇拜を本とせる宗敎は、哲學の解釋する能はざる底の不可思議を行ひ、人心を沮喪せしめずして、却つて之を昇進せしむ。額に愁の皺を寄せしめずして、却つて其の唇に微笑を湛へしむ。悲みによりて目を曇らすことなく、却つて生鮮の光澤を放たしむ。凡人の世界をして暗黑ならしむべき雲も、會ゝ以て此の崇拜者を溫め且つ樂しからしむるに資せんのみ。

かくの如く誠實なる靈魂は、絕えず快活にして、喜び、喜ばせ、樂しみ、雜しましむるものなり。

悲哀の用

先も、今も、後も、常に悲哀なき處ありや。先も、今も、後も、常に悲哀の訪れざる靈魂ありや。時として悲哀の訪るゝことなき處も心も共に不幸なり。天意は明かに、凡ての生ける人その全きを得んため、この神惠を味ふべきことを以て其の運命と定む。悲哀は唇に苦くして、而も靈魂の良藥なり。

悲哀の杯を飲み干さゞるものは、人生の意義に通ぜず。靈魂はおの〳〵別個の聖杯を授けられ、之を飲むことを求めらる。日本の宴會に於けるが如くに、君と我と互に獻酬することを許さず。或は彼の臺灣蕃族の酒宴に於けるが如くに、二三者が同一の盃より飲みて、之がために内容の不快を感ずること少きを得ることもあるべし。されど共有的または共同的悲哀は

靈魂の眞奧を動かすに足らず。吾人は各自に悲哀を忍ばずんばあるべからず。

基督信徒が其の主に捧ぐる、多くの尊號の中、最も景慕すべきは『悲みの人』の稱なり。艱難を經ずんば、眞の快樂あらず。死の陰の谷を歩むものにして、始めて大空の蒼々を仰ぐ。

されど思へ、悲哀そのものゝ惠福ならざるは、藥草の苦きと擇ぶところなし。藥劑學が若し規那皮よりして、規那と效能を同じくして甘き藥精を取るを得べくんば甚だ可なり。規那の效能は其の苦味に存せず、悲哀の功德は其の苦痛に在らず。苦痛を避けんがために、悲哀其のものを賤しめ、また之より遁れんとするは甚だ過てり。

實にや十字架を耐へて
漫りに刺を拔き去らぬこそよけれ。

我が心の、いとも尊きものを失ひて、
幸を得ることなからんがため。

悲哀の中には世人の夢想せざる甘味あり。實に快樂は悲哀の中に存することなしと雖も、之に代ふるに惠福その中に充てるあり。吾人が若し男らしく之を享けて、勇ましく之を耐へんには、悲哀の奧義は明らけく、吾人は耐へ忍ぶ苦痛の故にいよ〳〵賢なるべし。不思議なる靈性の化學は、最も苦き涙を結晶せしめて、純玉を造るを得べし。されど此の化學作用には、謂ゆる神惠てふ接觸作用あるを要す。吾人が悲哀を用ふるの如何は、即ち我が靈性の發達を量るの尺度なり。

惡中の善

地は綠草が生氣を與ふることなきさまでに荒れず。物は生命の望を有せざるまでに死せず。人は矯正することの難きまでに、全く腐敗せず。凡そ物は如何に惡しくとも、其の中之が償をなすべきものを有せざるなし。人口を極めて、其の敵を罵詈するときには、必ずや敵にもなほ取るべき點あることをば、措いて問はざるなり。惡魔も其の忍耐力と、精力とよりせば、敬服せらるべきなり。人若し予に告げて、其の友人または仇敵が墮落して、最早一縷の望もなきに至りたりといふことあらば、予は之を聞いて、寧ろ斯くいふ者こそ、其の懸念するものよりも一層失望すべき狀態にあるものならざるかの疑なき能はじ。古歌にいへらく。

植ゑて見ば花の咲かざる里もなし

此の世はベルゼブブの業にあらず、大魔王の治下にもあらず。ニーチヱが反覆論斷すとも、神は死せず、眠らず。到處として、神の古き足跡の認めらるべきのみならず、また其の生ける足音をも聞き、舊くして新しき神の指痕を存せざるはなし。吾人は最もと暗黒なる處にも、最も陰沈なる時にも、神の善を認むべし。

汝、重荷を負へるか。其の荷は貴重なる貨物なり――恐らくは黄金ならん。汝、影暗きか、是れ光明の强き證據なり。汝、砂漠に彷徨へるか、さればオアシスを望め。君の運命は荒野に棄てられたるものなるか、さらばマナの降るを待つべし。人間到處有青山、之を認め、之を樂しむことは、汝の心のみに由る。希望に滿ちて、快活陽氣なる精神は、必ずや惡の中に、善魂のあるを認む。彼に往くところに光を運び、啻に自己の狹路のみならず、また之を貫ける大道を照らす。彼は病床に侍して回春の時を知り、蒸蒸たる黒雲の一端に、金色の光の耀くを見る。檐下に伏し屈める乞丐に就いても、なほ神明の光を認む。彼に於て、凡ての男子は英雄なり、凡ての女子は貞潔なり、凡ての地は神の宮なり。呟かず、呻かず、坦々たる世路を歩みて、同胞の心を悅ばせ、其の荷を輕くし、苦辛の生涯を味つけて甘美ならしむ。彼は騷々しく喇叭を吹き立て、汚れたる目にて、惡を探り求め、恥を暴らす、世の改革家の徒よりも多く奏功す。

潔くして罪なき心は、愛の光を注ぎ、同情を以て悲みの家を照らし、只だ其の在るによりて、罪窩に改悛を齎す。此の心最も神に邇し。

いふ能はず

予は頭を俯す。されど予は何者のおはしまして、崇敬を命じたまふかを

いふ能はず。予は跪く。されど予は未だ何の力の、禮拜を求めたまふかをいふ能はず。予は祈を捧ぐ。されど予は未だ何者の、この誓願を聞きたまふかをいふ能はず。

予は知るもの悉くを語る能はず、感ずるもの悉くを知る能はず。

予もし感ずるもの悉くを知り、知るもの悉くを感ずべくんば、予は一層深厚なる崇敬の念を以て拜跪するを得ん。

亡國

夕空晴れて麗かに、日將に沒せんとして、天藍を染め、西方地平線は、茜を廣げて、明日の快晴を約す。

予の座する處は一世紀の昔、此の地を以て世界の中心とするの大野心を抱きし、韓王の建築せる一園亭なり。王これに名づくるに、詩趣の『訪華

隨柳亭』を以てせり。

一望の稻田、北、光敎山の麓に連り、崎嶇たる山嶺紫色を呈して嚴峙す。西は、微笑靜なる山陵これを蔽ふに老松あり。此の國に來りて、たま〳〵樹木鬱々たる山陵を見るは、殊に目を悅ばしむ。南は地平線上、杳かに華山の一角を望み、果水は直線に流る。近く一池あり、蛟龍之より昇天せりと傳へ、今もなほその幽趣を存す。華嚴なる水門は、予の斯文を草しつゝある園亭と共に、正祖大王の崩後、無情の時と無殘の人とに由りて毀たれぬ。昨は果水の堤上、嫋柳を列ね、今は其の殘るもの稀に、僅かに水涸れし磧に枝を垂る。アヽ我が友よ、石にせゝらぐ一條の細流は、そも〳〵枝垂柳の注ぐ淚か。曩には山々に榮えし百花その跡なく、白妙の衣を纏ひし大宮人や今いづこ。華を訪ひ柳に隨ひける羅綾の女房や今いづこ。石壁、水門碎けて粉屑となり、寒熱の壞つにまかす。山裸かに、森荒れ、曩には

綠苔の蔽ひたりけん巖石露はに禿出す。田は瘠せて、田夫が鋤と鎌との勤勞に報ゆること豐かならず。

最も悲しきは、民力涸れて餘す所なきことなり。努力の源は竭きぬ。勤勞の刺激また存せず。男は白衣を着て座し、長き煙管を吸ひ、昔を夢みて、今を思はず、また後を望まず。飢來れば、乏しき糧を得んが爲に蠢動す。女―彼の憫むべき女―人生の勞苦は、到るところ、その雙肩に最も重く、昨日も今日もいつまでも、家人の白衣を打ちて滌ぐ。而して紅顏女兒の如き美少年は、壯夫なほ耐へがたき重荷を負ふ。

今夕、柳樹の蔭に沈吟すれば、覺えず悲想の予を襲ひ來るあり。曾てグラナダ・コルドバ及びヴアラドリツドの廢趾を訪ひし日と等しき感慨また予が胸を打つ。風は乾けり、然るに我が眼、涙に濕ふは何故ぞ。天は朗かなり、然るに予の心曇るは何故ぞ。

是れ、空氣の罪にあらず、土壤の罪にあらず、また之を以て、疲れ果てし、無害の民の罪なりともいはず。歷史をして罪を判かしめよ。歷史は從來よりも、一層明確に判決せん。

（三十九年十月朝鮮水原）

朝鮮の原始的生活と枯死的現狀

朝鮮衰亡の責任者は、氣候にあらず、土地にあらず。西班牙人慣用の格言は、移して爰にも適用するを得ん。曰はく『天地共に善し。惡しきは、此の二者の間に存す。』と。然り『たゞ人のみ罪に汚る。』凡ての罪惡は彼によりて生ず。

予は車に乘りて全洲の野を過ぐ。此の地は韓半島中、最大平野の一なり。秋天高く澄み、風强くして爽かなり。無數の雁は群を成して、南方の故鄕に歸るの途、暫く此の地に泊まれるか。聞けや、かれは雁聲にあらず。見

よ、仙鶴堂々して翼を伸べて、近く頭上に舞ふ。早稲は刈られ、野路は刈稲を干して堆し。田夫は白衣を着て晩稲を刈り、鎌を取りて歌ひ、また田家の庭上、樂しき唄に和して、木片以て稲を叩き、また籾を扱く。茅葺の掘立小屋は、村里を成し、破垣の間、をり〳〵杵とりて木臼に米搗く女の忙がしげなるも見ゆ。赤衣白裳の小兒は、日本人の旅客を覗き、目を張りて呆る。

其の生活の簡易なるはアルカヂア的なり。予は千年の昔、神代の古に復りて生活するかの感あり。たゞ見る、住民の容貌は、神姿と見まがふまでに、恬淡にして、莊重なり、端正なり、されど甚だエキスプレッションを缺く、人民の相貌といひ、その生活の狀態といひ、頗るしとやかにしてうぶなり、また原始的なるは、彼等が二十世紀若くは、十世紀の人間にもあ

らず、否、初世紀の民にだもあらざるの觀あり。彼等は實に有史以前に屬するものなり。

予は信ず、斯國に於ける如く、生者の死者と相交りて起居勞作する所なしと。墳墓は山野に、恰も撒き散されたるの狀なり。我過ぐる路には、塚と埋葬を待てる藁の柩との列を成せるあり。柩既に腐れて、死骸露出せるもの少からず、されど爰を過ぎりて、ヨリツクの髑髏に沈思する一のハムレツトあらず。恰もパンテオンの廻廊を行くの感あり。荒村のハムデン、默默として名なきミルトン、國の血を流すの罪なきクロムエルも、嚴かに此處に眠れるなるべし。されど此の塚に座して、哀歌を書くのグレーあらず。

粗朴なる農夫は、絶えず死と過去との記念を徘徊し、勞作し、また休息

し、馴れては心も留めず、其の使命をも感せず。彼等は塚上に踞りて辨當を食ひ、兒童は牛を墓に牧して其の側に戯る。名も無き祖先の髑髏は、路上に棄てられて、人の蹴り轉がすところとなる。

愛を以て死を聖め、敬を以て過去を崇め、平凡なる現在を壯烈なる傳說に結び、生者の弱き心に、過ぎし時代の高邁なる記憶を充たすは、死者の與ふるインスピレーションの業なり。然るに祖先の遺骸が瀆され、日常之と接するに狎れ、腐れたる屍體が嗅覺を犯し、犬が人骨に戯るゝを見るに至りては、死はあまりに現實にして、またあまりに物質的なる事實となりて、其の精神的感化を行ふ能はず。死は却りて靈性の重荷となりて働き、之を向上せしめずして、鎭沈せしめ、之を鼓舞せずして、失望せしむ。かくの如く死と密接に關係せる國民は、自ら半ば以上死せるものなり。

此の人民のアルカヂア的簡樸は、何等原始的精力の約束をも與へず。其の習慣は吾人をして、ホーメルが歌、タシタスが上代獨逸人記、若くは古事記の生氣ある記錄に見ゆるが如き野生的氣魄を想起せしめず。

朝鮮人の生活習慣は、死の習慣なり。彼等は民族的生活の期限を終りつつあり。彼等が國民的存在の進路は殆ど行き詰りたり。死は此の半島を統治す。

（三十九年十二月）

悲みの德

悲みは、王侯の金殿にも、また農夫の白屋にもありて、その統治せざるところなし。才も美も、門を鎖ざして之を防ぐを得ず。嬰兒が無心の泣聲にも、その影は仄く。壯者は閑居して、之が在るを感じ、老人は之と友ならざらんとするも得ず。

自然は悲みの絹糸もて、人を同情の縁に繫ぎ、彼を訓練して、社會にありて互に忍ぶことをなすの、全くして大いなる生涯を送るを得しめ、而してまた彼をして神の國に於ける至高終極の存在に入るに備へしむ。

時感

今再び時の境に立てり。舊歲去つて新年來るを見るは、此度或は吾人のための最後ともなりなん、されど決して之を以て始とせず。吾人は樂しきクリスマスと、目出度き新年と、大晦日と、新玉の年とに伴ひ生ずる、一種の靈覺を斥くる能はず。想はざらんとするも、なほ機會に纒はる感想あり。クリスマスは、新たに生れたまへる嬰兒の麗しき物語を傳へ、人心をして逝く年の閾に立ちて、新たなる生命のゆるしを享くる希望を以て備ふる所あらしめ、頗る陰氣なる英國人の性情をして、なほ小兒らしき樂に滿

ちて嬉々たらしむ。老幼共に天使の歌に和し、新年は歌を調べ、合唱の聲を歡樂より高めて幸福に進む。

此の時季に適切なる感想は、文學界の大路小路にも、社會習慣の平野にも、また傳說の河流にも、到處に遍く散布せられて、人は此の時に特殊なる思想の侵來を免るゝ能はず。

大晦日は、年中の勘定を決算すべき審判の日なり。此の日には何某に對する負債を勘定し、之を拂ひ、棒を引きて、帳簿面を再び白くす。吾人は新しき曆の始に於いて、再び新たなる勘定の口座を開く。新しき曆と共に貸借を新たにするのみならず、また吾人の全思想を新たにす。吾人の祖先は歲時の移り變りを詩的に名づけ、『改まる』『新生命』の意味を以て、之を『新たま』と稱へたり。吾人は須らく此の時季を良用すべし。此の時を漫りに過すべからず。さらば如何にして之を用ふべきか。

クリスマスには、贈物に、讃美歌に、馳走に、その歡を盡くす事あれ。基督教徒にもあれ、異教徒にもあれ、凡ての人の家に喜あれ。基督は啻に基督教徒の爲にのみ生れたまひしにあらずして、また全世界の爲に生れたまへり。基督の事業は、教會歷史にのみ屬せずして、宇內の歷史に屬す。彼の生涯は、單に告白せる信徒をのみを靈動するにあらずして、また凡ての高尙なる行爲を愛するものを動かす。彼の死は啻にゴルゴタ山上の地を貴からしめしのみにあらずして、また地球の全表面を聖ならしめたり。彼の精神は吾人の呼吸する此の空氣に滿てり。吾人が或は彼の名を嘲り、或は彼の繪像に唾し、或は十字架を蹂み躪り、或は彼の生涯、教義を批判するも、吾人は依然として基督の事業を分擔し、其の恩澤に浴し、其の功業の仰慕者たるべし。基督は史上の最大事實なり。されば汝、彼の名を唱ふるものよ喜べ。彼を知らざるものもまた喜べ。彼は汝を識る。

クリスマスはたゞ宴樂に耽るべき時にあらず。吾人が此の日を樂しくするは、樂みのためにあらずして、地に平和、人に恩澤のためなり。平和なく、恩澤なくんば、樂みは卽ち放蕩なり、以て酒神バッカスを祭るに宜しかるべし。

此の日は、新たなる教訓が生れ、新しき倫理制度の開かれたる日なるがゆゑに目出度し。否、人は此の年の餘せる一週日を、冥想と反省とに用ひて、有益に過すことを得ん。

大晦日の大決算日に於て、吾人をして過去を回顧し、大膽に一歲中の行爲を反省せしめよ。經に曰はく、犁に手を付けて後を顧みるなかれと、されど吾人は自ら戒めて、この訓言を誤解する無からんことを要す。業を廢せんがため、又は目的に躊躇するが爲に後を顧みるは、薄志弱行を證するかなれども、若し既に畑を耕し終りたる時、後を顧みて、畦は眞直なりや、

其の深さは一齊なるかと注意するは大いに必要なり。實驗上、畦を作ることが、百三十ヤードより長きに過ぎず、短きに失せざるを以て、英國馬の成し得る最良の勞働と認めらる、吾人は經驗上より、一定の時を以て業を休みて、能く我が手のなしし業を顧みるを得んには、爲に吾人が精神の健康に補ふところ少からざるを知る。三百六十五日の各〻の畦の端に達するとき、吾人をして佇まりて後を顧み、若し得べくんば、果して何等の過失を爲しゝか、また打ち起したる土壌には、何等の幸福が撒がれたるかを見せしめよ。

予は信ずらく、一年を回顧するに當りて、こゝに熟慮すべき二事ありと、一は吾人の享けたる凡ての幸福を想起することなり。一は吾人の陷りたる凡ての過失を算ふる事なり。

人は何程注意するも、必ずしも故意か無心か、いづれかの過失より免る

ること能はず。『過あるが人間なり。』人間の天性そのものに、不完全なるもの存す。『毫も過なき人は、過ばかりなる人なり。』何等の過失を犯したるか、如何にして、また何處においてせしかを考ふることは、健全なる判斷力の健全なる練習なり。自己の過失を認むるは、良心をして明淨ならしむる所以なり。『自白したる過失は、既に半ば償はれたり』と。正直なる靈魂は、斯の歲の勘定を終る時、自己の良心の判廷に平伏して、麻を着、灰を被りて悔い改むべし。たゞ悔恨をして病的ならしむることなかれ。人間の一生は、いかほど不幸なりとも、曾て一年の間が悉く暗黒に包まれしことなし。喜悦の光、希望の光、良き計畫と決心との光の、時々彼が前途を照らさざりしこと無し。彼は天より得、また心より得て、我が有とせる善き物——彼が胸中より湧出したる善き物——を算ふべきなり。花の色香、鳥の歌、小兒の笑、日出日沒の光明など、一々これを數へ見よ。友人の信切

なる言葉、道路の人の微笑を悉く思ひ起せ。雲の絶間よりたゞ僅かに洩れ來る太陽の光、または街上に波立つ群集の中に認めし、一人の正直なる顔の如きも、之を忘るゝなかれ。最も不幸なる人間も、遂に人情の乳の數滴を味はざりしことなし。薄命者中の最も悲惨なるものも、必ずや一年の中には、情ある言葉を聞き、まだ愛の行を見たることなきにあらず。また人は、其の神明の本體につきて、何等かの表象を示すことなきまでに、甚だしき墮落をなさす。吾人の途には、心を悦ばしむべき無數のものあり、されど吾人は之に對して感謝を捧げず。

感謝する心は、幸福なる心なり、感恩と幸福とは密接に合體し、互に相倚りて始めて存在す。これ恰も不思議なる比翼織の、兩面に美麗なる紋樣を現はすに似たり。ゆゑに感謝すべき大晦日は、また幸なる新年の備をなすの日なり。

（三十九年十二月）

一年の幸福

新年來れば、我等互に相慶して『新年御目出度う』といふ。予は讀者に對しても、同じく此の語を繰返す。この語を繰返すに當り、予は衷心より諸君のため、數日の目出度きを願はずして、一年中の目出度からんことを希ふ。

『御目出度う』とか、『謹賀新年』とかいふ語は、何の思想も含まずしていひ、願ふといふ意味もなくして行はるゝやうになれり。其の語はたゞ空言に過ぎず、鸚鵡の嘴よりも出で得る程のものなること甚だ多し。

此等の言葉に就いて考ふれば、之に深き意義あり、味あり、人情の乳汁に富めることを知るべし。此等は蓋し我が友人は、三百六十五日間引續き幸福を享けよかしといふ、熱實なる希望を現はすための抄略簡約せられた

る言葉なり。

三百六十五日間の幸福！『それは不可能なり、あまりに慾張れり。人生は、一時に數日以上引續きて幸福なるを得べきものにならず。樂みも長く續かば、また幸福ならざるに終るべし』といふものもあらん。されど予は左樣に思はず、さもなくば予は君のために『新年御目出度う』とは願はざるべし。

予は常に幸福なり得べきものなるを信ず。吾人は幸福と快樂とを混同すべからず。如何なる快樂も、忽ち飽き、忽ち疲るべし。快樂は、不幸、悲哀、零落を伴ひ來ること多し。ラスキン曰へらく、『快樂に飽くことほど、厭ふべき苦痛はなし』と。英國の古諺にも『後悔なき快樂なし』といへり。然るに幸福は快樂とは異なる。

幸福とは、元來、仕合、好運の意味にて、偶然、または意外に何か善き

事に出合せたることをいふ。英語の“luck”は獨逸語の„Glück“と語源を同じくし、また“happiness”といふは、偶然の義なる“hap”より出で、佛語の“heureux”も同じ意味の“heur”より出でたり。日本語にて『さいはひ』といふも、又これ等の外國語と意義の等しき場合に用ひられ、『幸福』は『僥倖』と同義なり。かく幸福が偶然のものならば、これが永續せんこと、固より望むべからず。好運は浮氣なるもの、それが一ヶ處また一人の身に久しく止まるものにあらず。

幸福に對する觀念は、この語が始めて用ひられし時代とは、甚だ相違し、また大いに進化せり。今日にては此語によりて、快樂または好運を聯想せず、寧ろ兩者以上にして、意味の一層深長、高大なるものとす。有德の人は、快樂なくして幸福なるべく、之に反し、肉慾主義の徒は、快樂に迷ひて而して曾て幸福なるを得ず。

予思へらく、幸福とは、心に毫も憂ふるところなくして、其の官能を正しく用ひつゝある狀態をいふものなりと。幸福とは上より降るか、外より來るかによりて、之を獲るものと考ふるは人の常なり。されど幸福は心の狀態なり。物を獲るによりて幸福なる心のものもあれば、また物を斥くるよりて幸福なる心もあり。

幸福なるためには、心が掛念苦勞より免れて自由ならずんばあるべからず。心靜かに氣平かならずんばあるべからず。若し三百六十五日の間、每日この心を持たんには、即ち一年の幸福を享くるを得ん。然るに予の說を反駁し、例へば父の病の如き、自ら求めたるにあらざる原因よりして、心配の生ずることあるべしといふ人もあるべし。いかにも家族に病人のあるごときは、大いに幸福を殺ぐものなりと雖も、かゝる場合にも、若し病父を看護するに全力を盡さんには、我が義務を果せることを心中靜かに自覺

し、この自信あるがために、かの健康なる親と强壯なる子とが相鬩ぐ場合と異なりて、大いに幸福なるを得べし。

克く其の義務を盡し、また同胞人類に對して何等の惡感情をも抱かざる人に於ける幸福の感念は、いかなる悲哀も之を奪ふこと能はず。至大の艱難に處するも、此の人は頭を上げて微笑し、感謝を捧ぐ。聖者の言に曰はく、『神の懲したまふ人は幸福なり』と。

幸福なるものが、外部の事情とか、または物質的利得に因由するものにあらずとせば、則ち吾人は、自ら己を幸福ならしむべき要求を心中に懷抱するを得べきなり。吾人にして若し此等の要素を蓄へんには、即ち絕えず幸福なるべし。されば我が友よ、こゝに省みて、汝の心を持すること平靜且つ潔白に、同時に活動を心構へて油斷せざれ。さらばその自然の結果として、幸福は汝に來るべし。靈魂の平和を保つは、自己の力に由るにあら

ずや。吾人は心の平靜を得んが爲に、己が意志を用ふる能はざるか。之をなすは、たゞ戒心、努力に由るものなるは、吾人固より之を知れり。吾人の力能くこゝに至らんには、一年の歲月をして幸福ならしめんことも、全然可能なるにあらずや。必要なる條件だに具足せば、必然の結果は之に伴ふべし。三段論法の結論は前提に隨ふ、ゆゑに予は諸君のために『幸福なる新年』を祈る。

（四十年一月）

正月

プルタークは、一年の月名に關する美話を傳ふ。そのヌーマ傳にて、彼は羅馬の初王ロムラスの治世に、曆表に一方ならざる混雜ありしため、之を改正し、十ケ月なりしを增して十二ケ月としたることをいへり。その以前には、一月はマーチ、またはマルスといひて、軍神に捧げられき。蓋し

戰爭が國家最大の任務なりしためなり。ヌーマが曆表の改正をなしたるとき、デセンベルが、語源上第十月を意味するにも拘らず、其の後に二ケ月に增加せずして、年の初に加へて、一月をジャヌスまたはジャヌアリスと名づけて、同名の平和神に齋きたり。或る史家の說によれば、ヌーマの改正に先んじて、既に一年は十二ケ月に分たれ、ジャヌアリーは十一月の名なりしことをいへり。しかし斯樣の議論は、考古家の論究推斷に任せ、ここにては彼の好戰なる羅馬人が、ヌーマ、ポンピリウスの曆法を採用し、爾來歐羅巴全國が、戰爭と戰爭の噂との絕ゆることなかりしにも拘らず、之を襲用したることをいへば足れり。

ジャヌスといふ嚴かなる名稱を以つて一年を始むる、この神はそも〱何ものなるか。彼れ或は實際の人間—一個の希臘人にして、有史以前にラチウムに移住し、其の地の不逞の徒を支配して、馴致したるものなるか、

或はチーベル河畔の住民の信仰心によりて造られし想像物なるか、その何れなるにもせよ、彼は羅馬の諸神殿の大立物にして、ジュピテルに亞ぎ、而も時に此の主神とその名譽を等しくす。ジヤヌスはもと光の神、日の神なり、卽ち一の天照神にして、月神ヂヤナの相方なりしことは疑を容れざるものゝ如し。羅馬人は由來その神話と宗教とを希臘人より假用したるものなれども、ジヤヌスのみは、希臘人の知らざりしものにして、全く羅馬の神なり。而して地上萬物の源、季節、年時の作者、凡百の技術の發明者、及び宗教と文明との最初の教師として崇拜せられたり。

此等の理由によりて、一年の始を以て、特にジヤヌスを齋きまつり、元旦に於て、羅馬人は其の身、其の家を淸め、入口や戸に、月桂の環また枝を掛くること、日本人が七五三繩を張り、門松を立つるが如くせり。而して七五三繩が、人の所有物、邸宅を表象し、藁繩を以て財産の神聖をしるし、

何物と雖も漫りに之を侵すときは、咎なきを得ざることを示すが如くに、月桂は惡靈の侵入を拂ふべき不思議の力を有するものと信ぜられき。當日は人みな美服を纏ひ、不吉なる事をいふを禁じて、たゞ瑞相とか名譽のことのみを語るべきものとしたり。また朋友は月桂の葉に包みたる棗、無花果のごとき、我が國の茅卷(ちまき)に稍似かよひたる糖菓を互に贈答して、祝意を表するを常とし、神前には菓子、酒、香料を献じ、而して毎月朔日に於ても、同樣の供物をなしたり。

ジヤヌスは季節、年時、月日を支配するよりして、其の手には、天國の鍵を携ふるものと思考せられたり。其の姿は反對に向きたる二つの顏ありて、一は若く、一は老いて、萬物の始(アルフア)と終(オメガ)とを暗示す。此の神は毎朝、新たなる日の案内者として唱名せられ、種蒔の始には、農夫の禮拜を享け、商人は旅立をなすにあたりて、この神の宮に祈願を籠めたり。凡そ公私の

何事にても、新たに之を始むるに先だち、羅馬人がジヤヌスの冥助を求めしは、物は其の初が最も大切にして、これに迷信的意味の存するものとしたるがゆゑなり。特に新たに戰爭を始むるにあたりては、全國擧りて此の神の祐助を祈請し、戰爭の繼續する間、其の神殿の扉は開かれるまゝにして、神は軍隊と共に出征せることを示したり。

予が今日に於いて、舊めかしき多神教の神話と、既に廢れし其の崇拜とのことを語るも故なきにあらず。予はかゝる美しく且つ教訓に富める物語を説かずして已むべけんや。予は今こゝに世界の歴史に於ける羅馬人の地位を辯護するの時を有せず。彼等が何の害惡を爲し、また何の善益を斥けしか、此等は措いて、彼等が天意示現の跡に確實なる地位を有せることは否かべからず。若し然らずんば、一の國民として、始は武力により、次は法典により、更にまた言語によりて、三たび世界を統治せるが如きは、得

て望むべからず。予はこの偉大なる人民が、ジヤヌスのごとき平和、日と光と、凡百の有用なる技術、凡ての善き事始の神—温良なる風儀、睦まじき交際、公私の生涯に細心なる事を奬むる神—血の犧牲を求めず、祭祀に酒宴を伴はず、而して崇拜者が熱心努力するにあたりて祐助を求むるときは、必ず此等と共に在る神—かゝる神を造りて之を崇拜せしことを考ふるを甚だ愉快とす。

實際の理想に合する所

人は少くとも外觀に於て、平均せる形態を成せるため、何物にも凡て組織を立て、また之を統一せんとするの大誘惑あり。吾人が同じ長さと形との二本の手を有し、また二つの耳、二つ眼を具ふるために、何物と雖も、二樣の區別、分類をなすを得るものなりと思ふ傾向あり。左右をいふが如

くに善惡を云ひ――つまりは自然と生命とに二元あるをいふ。論理學者は、物を分類するにあたり、或る性質と特色とのあるものと、此等のなきものとに分ち、更にまた他の與へられたる標準に從ひ、之に合するものと、合せざるものとに小分し、而して終極まで、此の二種の分解を繰返す。

色に依つて花を分類する時、吾人は、赤と赤ならざるものとに分ち、また黄と黄ならざるものとに分ち、而して各類の區別が、吾人の心に明白となるまで此の方法を續くるなり。

吾人は此の二元法の立場よりして、事物を觀察するに慣れたるため、物の兩極を觀て、而して反對の思想にも、一致點のあることを忘るゝの過に陥る。一端が黑にして他端が白ならば、其の間には濃淡各樣の灰色あり。固體が氣體となりて蒸發する前には、一旦其の中間の液體を成さゞるべからず。有名なる某地質學者は、英國海岸の事を記して、往時一條の河流が

徐々に海に注ぐため、滿潮には水となり、干潮には陸となる地方ありたりといへるが、共の地たる、滿干二潮の中間にありては、陸にもあらず、水にもあらず、また水陸併存にもあらざりき。

吾人の道德觀念に於て、善と惡との交讓を以て、道念の薄弱なるを證するものとして非難するかなれども、善と惡との間にも、廣大なる中立地帶ありて、此處に在りては、方正なる人は苦悶し、多少不謹愼なるものは、『實際生活』とか、『免るべからざる惡』とか、『實利の要求』等とかいふ陳腐の語を以て自ら慰め、而してまた惡人に至りては、汚泥の中にありて之に安んず。

歷史の影の薄らぎて神話となり、神話の輝きて歷史となる境域あり、希臘の半神時代、日本の地神時代は是なり。人の靈的生活に於ても、また知識が最早滿足を與へざるところ、科學を棄てゝ宗教を迎ふるところ、哲學

の向上して信仰となるところの一帶あり。

　吾人の日常生活は、吾人に供するに、人生の最も卑しき實際事が、理想に入り、また理想が最も賤しき勞役の形を取ることの廣大なる區域を以てす。この至高の眞理を最も明かに認識したる哲人フイリツプス、ブルークスは曰はく。

『實際生活とは果して何ぞ。これぞ地上の生活の悲しむべく卑しき細目にして、而して其の汚泥中に靈的、超俗的なる花實を生ずべき種子を藏することの暗示の一つだによりて、以て靈動せらるゝことなきものゝ謂なるか。之に反し、實際生活とは、天上の星よりも高き一界に於ける生活の幻影にして、其の生活の超越し、脫離したる人類界の荒涼にして墮落せる狀態とは、何等の關係する所なきものを謂ふか。否、決して然らず。人の實際生活とは、最も賤しく、また最も平凡なる經驗によりて培

はれ、之れと絕えず聯關せるものにして、人の最高なる成達を謂ふものなり』と。

　一椀の米を食するにも、感恩の心を以てし、天意を謝し、貧窮を愍むもの日常の勞働に服するにも、之を以て天の命なることを思ふもの—神の名に於て、神の子の最も賤しきものに一杯の水を與ふるもの—此等のものは即ち實際の理想に合する處に關する、凡ての疑問を解決すべき好地位にあるものなり。

人物崇拜

　米國は其の地廣大なり。ロツキーや、シエラや、蒼穹に聳え、ミスシツピーや、コロンビアや、渺茫たる大平原を流る。コロラドの峽谷は其の深さを知らず。ナイヤガラは轟聲天を劈く。予は足この地に入るごとに、新

たにしてまた絶えず增加する勢を以て、其の大陸の如何に廣大なるかを感ぜしめられたり。眞に偉大なるものゝ特色に、人これに思を馳することいよ〳〵多くして、其の偉大の量に對する思料想像はます〳〵大なる致すものなり。これに反し小事、小人に至りては、たとひ一時は吾人の想思を動かすべき壯大の觀あるも、やがて衰へて本來の微々たるに復す。然るにただ神のみ、人の其の性を精察すること深く、其の德を觀ずること多きを加ふると共に、いよ〳〵大に、いよ〳〵高く、いよ〳〵神祕にして、いよいよ驚異すべきものとなる。

大且つ善なる人は神性を有し、無限大の資格を備ふ。吾人は俊傑の細瑾小過を見ることにのみ心と目とを勞する奴婢の流にあらざる限り、崇拜の目的物に就いて、絶えず之を尊重すべき新らしき理由を發見すべし。崇拜の念の失せたる人は愍むべし'Nil admirari'(無崇拜)は危險なる道德病の

兆候なり。高潔なる人間、特に青年輩は須らく自己に優りて高尙偉大なる者を尊重し、崇拜するの念に滿つべきなり。崇拜する能はざる人は、涸れし泉の如く、最早自己の渴を癒することも能はざれば、また其の流を以て田野を喜ばすこともなし。溪水の欣然奔流して、大河に合するが如く、河川の海洋を求むるが如く、堆土は丘陵の一段たり、丘陵は山嶽の始なるが如く――セミストクリーズは、マラソンの勇士團に加はらんことを希ひ、吾人はまた筆は秉好、忠の楠氏の達せし高度に到り、而も能ふべくんば、彼等より優越せんことに志さざるべからず。

予は人傑中最もリンコーンを崇拜す。而して彼を學ぶこと久しくして、彼はいよ〳〵大なるの觀あり。其の缺點すらも、瑕は次第に消えて、啻に之を恕すのみならず、また之を喜ぶに至る。是れ實に吾人の誡むべき人物崇拜上の危險なるを知る。されど予は自白す、蓋し己むを得ざるなり。

而してまた斯人の缺點は、人類の幸福を害する類のものにあらず。彼の不恰好なる容姿、粗野なる態度、其の醜面は、彼の温厚仁恕を思へば、忽ち意に介せざるものとなる。然り、此等は却つて斯の人の温和、質朴、寛容なるを、不完全ながらにも表相するがゆゑに、進んで愛好すべきものとなる。

予の斯文を草するとき、リンコーンの半身像は、予の前にあり。冷きカラ、大理石の唇頭には聲あらず。されど其の唇が、予の愛誦する "With malice towards none, with charity for all" (何人にも害を加へず、凡ての人に對するに愛を以てす) との語を以て微動するを見るが如し。その視ることなき凹みたる眼には、神と人とに對する幼兒の如き信仰は閃き、其の秀でたる額の皺は、彼が多くの笑談の被ひ隱すこと能はざる程に、深き悲哀と愁思との存するを示す。其の凛然たる眉と高き鼻とには、人を服するの

威あり。其の口と其の顎とは、決意斷行の人格を證す。蓬々たる長頭——吁、此の一圓塊は、米大陸の大よりも更に驚嘆すべきものを蘊藏したり。詩人曰へらく『義人は、神の業の中最も高尚なるものなり』と。造物主は、其の造りたる最後の大陸を此の世に置くや、ロッキー山脈より人道の大塊を削りて、之を包むに大平原の軟土を以てし、其の鼻に我が生命の息を吹き入れ、之を名けてアブラハム、リンコーンといへり。

春想

日輪の進みにつれて、季節の移りゆく毎に、我等は其の折々の使命に心を寄せん。鳥の歌、花の色にも、何等かの歡樂、何等かの教訓あるにあらずや。

鶯の歌に耳を欹てゝ、自然の我等に語る無聲の聲を聞き、また彼女が人

心に奏する樂を寫せる多くの言葉を聞け。開かば心、天に向つて開き、雀の囀るにも、天津御空の音づれを告ぐるを聞く。

綠なす野邊、黑金の土より萠え出づる花を見よ。一莖の草にも、祕密の祕密たる生命の半ば隱れ、半ば現るゝにあらずや。『破壁に吹く花』だにも、哲人の手に在れば、最大の問題、卽ち神と人との問題を解くの栞となるとかや。梅花今や馥郁たり、然るに梅枝に隱るゝ寶に想到せざる人は、春復り來るも、なほ貧し。

思へ、自然は人を罪することあるも、決して侵略的ならざるを。自然は命令訓戒を叫ばず。不聞の人には默し、不問の者には語らず。彼女の使命は、見るを厭ふ目には封じて開かれず。

地は天にて塡められ、
小かなる叢も神の火に燃ゆ。

目あるもののみ、靴を脫ぎて、
その邊に坐して、莓を摘む。

自然の戶前に跪く人のみ、彼女の室の祕所に迎へらる。敬虔は、以て新舊大小の物を藏する自然の寶庫を開くべき鍵なり。幽玄なる眞理は、物質的なると、精神的なると、また人間的なると、神靈的なるとを問はず、吾人が膝を屈し、頭を俯する時に於て、始めて善く之を學ぶを得べし。

好奇にして無禮なる科學が、解剖刀と顯微鏡とを携へ來り、大膽に自然を精究するや、彼女は卽ち其の求むる所のものを許す。されどたゞ斷片、零屑を許して、他、また與ふるもの無し。感情は自然を慌しく瞥見して、一二の輕薄なる歌を捉へ、而して自ら此の世に與ふるに多くの輕薄なる歌を以てし、青年男女を惑はして、自然の嚴かにして眞なる訓戒を聞くを得ざらしむ。

自然の最も莊重なる教訓は、之を傳ふるものが、樂しき鶯にもあれ、香れる梅にもあれ、囀る雀にもあれ、はた路傍の草にもあれ、みな吾人をして一層神と人とに近づかしむべし。

一撮の鹽

英雄も、君が彼は斯くあるべしと信ずる如くに完全ならず。敵も君が斯くあるべしと想ふ如くに奸惡ならず。一年の中僅に數日、富士山は、畫家の好んで描くが如き美觀を以て、其の榮光を現ず。されどまた其の山容の全く隱れて現れざるが如き、暗黑荒凉なる日は尙少し。人生は樂天家の歌に讃ふる如く樂しからずと雖も、また厭世家が、哀歌によりて歎くが如く憂きものにあらず。

一撮の鹽！吾人は鹽を以て凡ての物を味つけ、吾人の嗜好に適せしむべきなり。人おの〳〵異なる所あり、皆其の隣人と悉く一致するを得ず、また多少の斟酌なくしては、みな其の友人若くは其の敵の判斷に服すること能はず。

天使の歌ふや、吾人は莞爾として之に耳を仄つるも、なほ之が最高調に失するの感あることなきにあらず。惡魔の囁を開けば、其の語に多少の眞理を發見することあり。黃金の砂塵に混ぜるを認むる如く、甚だしき虛言にも、往々眞理の閃きあり。信實なる話にも、時として故とならぬ謬言の潜むあり。最も賤しき實在にも理想は存し、最高の理想も、卑賤なる行爲によりて、其の全部若くは一端を實現せしむることを得るなり。

一撮の鹽！されど吾人は心して其の量を過すべからず。多きに過ぐれば甘きをも苦くし、少きに過ぐれば不味の食物を嚥下せざるべからず。鹽の適量を定むるためには、一定不變の規則あるにあらず。人はおの〳〵己の

鹽量計を有すべきなり。『悉く書を信ずれば、書無きに如かず』と。分別して讀み、批評的に學び、愼んで考ふべし。正確なる判斷、善良なる趣味は人生に缺くべからず。節度、中庸は、正當なる判斷、善良なる趣味の祕訣なり。鹽は緩和者なり。

鹽梅せば、食ふに堪へざる食物なけれど、鹽梅せざれば、食ひ得べき食物は尙更あることなし。鹽を適量に用ひることなくば、吾人が日常の食物は甚だ厭ふべきものとならん。鹽なくしてはデルモニコも八百膳も始まらず。人生そのものは粗造品なれば、殆ど何物も其の純なるまゝにては用ふべからず。予は固より青年の熱情を冷却せんとするものにあらず。されど之がやがて失望に沈むことのなからんため、彼等が理想を追求せんとするにあたり、其の先づ一撮の鹽を用意せんことを勸むるものなり。

花下にて

枝頭に春の色浮べり。其の下を步めば、落花わが頰を掠むるを感じ、地に散り布く薄紅の芳ばしきを踏む。人心は絕えず自然の變化に感ずるも、草木土壤の眠れる力が目を醒まして、一年の熱烈なる活動を始むる時のごとくに、其の甚だしきはあらず。快樂は悉く甘美なるも、爛漫たる櫻花の下にあるが如くに甘美なる快樂はあらず。されど心せよ、花に迷ふことなかれ。

快樂は、身も心も傷はざらん限り、罪をなさず。予は淸敎徒的に、凡ての物質的歡樂を憎むものにあらず。これまた其の宜しきを失はざれば、心の快樂、靈の惠福と等しく天惠なり。一朝の樂は、往々百年の憂を遺すの本なりと雖も、予はそれすらまた能く知的、靈的の悅びに結びて、持續的

いな永久的性質を有せしむるに足るものなるを信ず。

予をして今を盛りの花の蔭に停みて、其の香に飽かしめ、薫風吹き來りて、我が顔に落花を點ぜしめよ。而して冀はくは、花よく我が靈と語りて、我が思想を高め、予をして俗界の美を去りて、天上の美に想ひ到らしめよ。

夜の教訓

吾人は永遠の存在物に心を用ひずして、之を看過す。花おの〳〵其の季あり。櫻は其の受くべきだけの光榮を受くれば、後繼者の牡丹、藤に地位を讓りて過ぎ去る。時代はおの〳〵、特別のヒーローを有し、ヒーローはおの〳〵特別の時代を有す。『犬みな其の日あり』とさへいふ。

されど星—列宿はみな、通常人間の目には、不變不易の大空にかゝりて、恆定不動なるの觀あり。而して其の光榮美觀に相當なる貢物も崇敬を受けず。見ゆれども感ぜられず。一時の感覺を動かせども、感情性に觸るゝことは稀なり。

此の夕、予は友と別れ、彼等はおの〳〵其の道に歸り、予は獨り我が道を歩む。知らず、また會ふことのありや無しや。予に心中に祈りて、彼等がいつまでも健かに且つ幸にして、愛と友情とに於て渝るなからんことを求めたり。星は朗らかに晴れて燦き、地上の旅客を見て笑み輝く。

人生の旅は、常に天光に照らさる。日沒し、月隱るゝとき、星は鋭き光もて、我が道を照らす。きらめく星、『制しがたき意志の星』には力あり。オライオンには無限の精力あり、プレアデースには愛と情とあり。大空は、目あるもの、心ある者の學び得べき教訓に最も富めり。かのコンコルドの哲學者が、天を仰いで、幽想に耽りつゝ、

たゆみなき御空の星よ、汝が心を教へよ。

とこしへの御空たかく、よひ／＼毎に閃きのぼり。
影も疵もとゞめず。
年月のあともなく、死の憂もなし。

と歌ひし心よ、想察なか／＼に及びがたし。

人間の目には小さけれど、星の壯觀は言も及ばず。日昇れば消え、我が一小恒星の住民は、太陽の光榮を見て、星の光に輝き勝るとす。されど星は太陽と競ふの意なし。星を隱さんとするには、日光を借り來るまでもく、カーライルが曰ひしごとく、一握の藥を燃やせば、即ち可なり。されど藥の燃え盡き、日の沒するとき、星は再び輝き出づ。

予は夜の淋しさに星を仰ぎ、心を空しくして、其の偉大とは何を意味するかを學ぶを喜ぶ。

實行宗教

宗教は感情を高雅ならしむるものなるも、これ感情の問題にあらず。宗教は一面に於て狂熱的亢奮ならざるごとくに、また一面に於て漠然たる感情主義を排するものなり。

いかに玄々高遠なる宗教なりとも、知識的プロセスにあらず。知力を十分に用ひることは妨げざるも、また吾人をして科學に醉ひ、哲學に溺るゝことより免れしむ。

宗教は概するに意志の働なり。予は宗教を定義して、人意を働かせて、之を神意と一致せしめ、また人の靈性を神性に沒却するものなりといはんと欲す。神學のごときは、宗教の副産物たるに過ぎずして、さまで重要なるものにあらず。教義に關する知識は、神に從ふ行爲の生ずる自然の結果

なり。然るに吾人は往々この順序を顚倒し、先づ神意を爲すことなくして、宗教を得、且つ之に達せんとす。

始めてレリジョンの語を用ひしは、シセロなりと記憶せるが、彼の定義によれば、『宗教は神に對する吾人の義務を盡すことなり』といへり。されど吾人にして若し人に對する義務を知るにあらざれば、決して神に對する義務を覺る能はず。

禮節

禮節は王公の宮廷に產れたり。されどまた農夫の庭にも住みて榮ゆることを得べし。眞の禮節は、主君の我儘、感情を迎合して、膝を七重八重に折り屈む宮人の藝當にもあらす、また娼婦が商買道具の一つとする追從にもあらず。眞の禮節とは、佛國人が『心の禮』として、他と區別して稱す

る共ものを意味するものにして、これ卽ち高潔なる人々の間にて、互に善意を行ひ、相敬ふことなり。禮の要素は、形態にもあらず、叩頭にもあらず、衣服にもあらず、鄭重なる言語の交換にもあらずして、二三の自重的人物が、相互に表する尊敬なり。而して宮人の阿諛、娼婦の追從の如きに下落すること無し。純乎たる禮節は、高士、勇者の特色なり。我が國中古の戰爭に於て、二人の武士が行合ひて、イザ一騎討と云ふ場合に、禮儀を交換したる事に、頗る奥床しき點あり。敵に對しても、相當の敬意を拂ふべきなり。尊敬するだけの價値なき人物は、また以て刄を交るの價値も無き者なり。予は彼のクロムウエルと、ジョージ、フオツクスとの會見の狀を思ひ浮ぶるを快とす。この淸敎徒の最も偉大なる者と、クエカーの最も偉大なる者との、粗豪なる二巨人の初對面に、何等形式的の慇懃のあるべくもあらざりしなり。この二人對面の光景に於て、男らしき禮節の眞實に

交換さるゝを認め、且つ之を感ぜざるを得ず。その故は吾人の心に、何者にても正直、强大、誠實にして、神の如きものを崇拜する念の深く滲み込みをればなり。

文字の眞義

文法を偏重し、文字をば其の語源の意味にのみよりて判ずるは宜しからず。言語學とは、今日もなほ要するに道樂的學問の觀を呈す。二流三流の言語學者は、容易に唯の駄洒落屋、地口家と下落す。一つの文字を使用する時、其の根源、變化、歷史等は、言語其のものゝ意味に比ぶれば、甚だ重きを成さず。而してまた其の意味なるものも、其の文字が表すところのものと比ぶれば、些もいふに足らず。吾人が之を語り、また聞く時に、捉へんと欲するものは、其の含む所の思想なり、實質なり。最も雄辯なる演

說も、風の音、水の聲に優ることなきあり。多辯して、語ること少きあり。談話に力あらしめんとせは、其の後に思想若くは人格を控へずんばあるべからず。かくて言語は生命となり、辯舌は行爲となる。

田舍の道德

擾々たる人寰を去ること遠き此の山谷の間、快樂の潜めることの何ぞ多きや。草木の綠は、都府の公園に於て見る能はざる色なり。花——園藝家がガラスの下に培養したる、弱々しく萎れたるものゝ類にあらずして、天然てふ大園丁が育成せる、强き野生の花は、山を包み、草叢の中より覗ひ、また路傍到る所に諸君に會釋す。

土壤の產みたる子女よ、歸れ、鄉土に歸れ。天然に歸れ、田舍は汝の歸來を俟つ。奇松は爪立して、汝の來るを見んとし、老杉は、兵士の如くに

整列し、汝の到着を迎へて敬禮せんとす。栗の枝は風に搖ぎて汝を招き、紫雲英は、いと美しく笑みこぼれ、杜鵑花は、汝のために盛飾す、雀は歡迎の歌を囀り、蛙は、昔の友を思ひ出でよとばかり、聞えよがしに鳴く。

天然の物みな向上し、大地は少年の英氣を以て活動す。

吾人は須らく、都塵を去りて、田野の間に健康と簡易の生涯とを求むべきなり。

麥は刈り、田植は了り。農夫は爰に數日の閑を得て、子女の都會より歸り來るを待てり。學校よりして、田舍の家庭に歸る青年男女は、即ち文明の先驅者なり。彼等は田舍の父母、親戚、朋友を侮るべきにあらず。却つて彼等に傳ふるに、廣き世界の音づれを以てすべきなり。夫れ品性が田舍に貯へられたりとせば、敎化は都會に產る。思想は靜處に長じて、人生の荒き海に突進して働くものなり。聖クリソストムの與へし忠言を記せよ。

曰はく『大道より離れ、圍はれたる土地に己れを移し植ゑよ。路傍に立てる木は、熟するまで、其の實を枝に保つ能はず』と。されどまた實は熟するとき、其の數の許すかぎり、多くの人に分たるべきものなることを忘るべからず。また氣力が寂寞たる田舍の天地に發生すとせば、禮文は大いなる社交的集合體の生產なり。此の兩者の德を兼有する人こそ幸なれ。

爲と無爲

予は廣く地球の表面に放浪して、異なる言語、異なる思想の人と會し。また彼等と語りたり。而じて予の觀察は是なり。即ち痴愚なるもの——無知にして惡を爲すもの多しと雖も、惡に對して頑固執拗なるものは稀なりと。後者は時として罪惡を犯す爲に正當の罰を受くることあるも、前者に在りてもまた往々義務を怠るの罪あり。人は皆、その最も優れたるもの

と雖も、なほ相互に、又は同時に此等の範圍の孰れかに屬するものなり。吾人宜しく、自己に加ふる笞は嚴なるべく、他を牽く綱は緩かるべし。經に曰く『人を審判くなかれ』と、吾人をして、自己を良心の法廷に引出ださしめよ。是に於て、吾人が爲せる罪と、爲さざる義務との審判は、即ち吾人の應報を量る。この法廷の門戸を通ずるによりて、吾人は始めて道德的生命の高位に登ることを得るなり。

宇宙の調和

秋夜の新月は、見晴山の頂に麗り、晃として女皇の寶冠を飾れる夜光珠の如し。

月、何の樂しき奧義を低語けば、溪流しかく莞爾として迸るや。月、何の深き秘密を示せば、平穩なる湖水の、しかく邃として賢なるの觀をなす

や。彼女の一瞥は、河畔の柳に命じて、その搖ぎを速かならしめ、また長歎せしむるか。彼女の指呼に應ふるためか、妙なる蟲聲は、風のなびかす草叢に啣つ。

自然は凡て一なり、其の無限界の間、生物、無生物の間に、天力ありて働き、人目には、個々の小生涯を營まんが爲に、無窮の爭鬪をなすと見ゆるものをして、悉く一大調和に合せしむ。予は正に之を感ず。

望ましき成功

陋なるかな、小人の輩、腐れたるパンの一片を爭ふに狂して、互に其の肉を破り、かくて或は他に先んじて之を食ひ、或はその最大片を奪ひ得たるを稱して成功と謂ひ、人は彼を目して時代の英雄となす。

成功とは、人概ね以て、何等の陋劣なるものにもせよ、起端に於て目標

としたる點に達するの義なりと云ふ。世俗の說は、志の高下如何、成功の方便如何を問はざること多し。薄志弱行の目には、たゞ雲霧の中に閉されて、其の姿を見るも稀なる高峯を志し、之に攀づるの難きを知りつゝ、なほ敢て之に達せんとし、毫も其の勞に屈せざるものゝ如き者は、世嘲りて空想家と云ひ、失敗者と呼ぶ。之に反し、思想は一寸も塵界を去らず、最大希望は唯此の土壤を匍匐することに在るものは、容易に其の大望の目標に達するを得べく、世俗が謳歌して成功と稱する冠を受くるを得べし。

自ら毒盃を取りしソクラテスは、當時のアゼン人——然り彼の此の盃を仰ぎたる其の一日だけ、世人の眼には、笑止の失敗者なりき。彼を罪せし者は、其の最大偉人を除き得て、成功に誇りたり。されどソクラテスは、鬼神に服して、已の生命を棄てたるがゆゑに成功せり。更に宇內的大成功の適例は、ナザレの耶蘇なり。史上曾てカルパリ山上の耶蘇の如くに、完

全なる成功を得たるものありや。死は彼の目的とせし所、之に向つて其の生涯を始めたり。猶太の高僧は、其の希望を果たし、其の嫌惡忌憚せる人物の死によりて成功したり。イスカリオテのユダも亦、其の慾望せし三十金を獲て、見事に成功せり。

神は凡ての者に善からざる無し。『其の日を善き者にも惡しき者にも照らし、雨を良き者にも、良からざる者にも降らせ給ふ』と。されば人多くは、其の分に隨つて成功す。人は皆、其の願望に應じて、日光を得、雨を得るなり。雨戶を閉ざす者は、僅に節穴より忍び入る數條の日光を受け、豐作を收むるに意無き農夫は、たゞ一杯の雨をのみ受けけん。

成功そのものは、敢て羨望すべきにあらず。たゞ成功が高尚なる事の爲になし、高尚なる勤勞を冠する意味に於てのみ、之を得んことを冀ふべきなり。

矛盾の矛盾

舊歳終り、新年來るや、人皆、靈肉共に躍如たるものあり。

街上見るところ、聞くところ、全都嬉々として、恰も敬虔なる僧侶の常に侮蔑嫌忌する所なりし、彼の『痴人の樂園』に化したるの狀あり。群集また群集は電車に混入し、路上に雜沓す、知らず、何處に往き、何處より來るかを。店頭は各樣の商品、その色彩の華やかなるを陳ねて、行人の目を奪ひ、忽忙たる足を止めしめざるなし。無數の提灯、電燈は、夜をして晝の共働者たらしめ、赫灼たる太陽の光を歎き、無數の旗幟は風に飜り、陋巷を變へて、色美しき都大路となす。都市の華麗なるに加ふるに、到るところ快活なる樂隊の音樂あるを以てす。光景、聲音みな實に『痴人の樂園』を表す。

されど予は敬虔なる厭人者流を氣取りて、此の快樂の光景を賤め、之を以て陋劣なる虛榮の市場なりとせじ。タイモンよ、汝は之を見て、單に一時の現象なり、一吹の呼吸なり、今在りて、直ちに無きものなりと云はんとするか。汝、知らずや、紅葉が枝を去りて地に落ち、高尾の山に散り布くの前、暫し風に漂ふの間に、哲人の心に敎ふるに、植物生命、引力、氣壓の無窮の法則を以てするにあらずや。最も脆弱なるものゝ後には、最も强大なるものあり、無常の陰には恒久の活動あり。

我が耳にして誤らずとせば、予は喧噪たる音聲の中に、深大なる悲哀の忍音を聞く。何の思ひ煩ふことなき處女子の倫笑に、無量の歎は隱る。我れ欺かれたるにあらず、予は人々の顏に憂苦の表象を認む。同情の眼は直ちに華美なる色が、たゞ其の辛酸の畫の太き線を消さんための、拙劣なる彩色たるに過ぎざるを見ん。

店頭の窓前、到る處に歩を停めて、商品を打戌る女の忙がはしき目元に、貪婪、慾望の現れたりといふこと勿れ。予は其の目には、文字もて明かに記されたるが如くに、『彼の衣服は、我がヨシ子に如何ばかりか似合ふべきぞ。さりながら先づ家賃を拂はざるべからず』とか、『彼の玩具は、我が嬰兒の最も愛好せし類のものなり。天國にも達磨あり、大鼓あるべきか』といふを讀む。襤褸裸足の貧少女が、飾窓に爪立ちつゝ、人形の居並ぶを見て、其の圓やかなる眼を喜ばすとき、誰か其の情を察せざる。是れ實に人間の缺乏の飽かされず、人間の慾望の充たされざることを示す一幅の畫景にあらざるか。

厭世主義にもあらず、厭人主義にもあらず、不興にもあらず、嫌惡にもあらず、たゞ憐愍よりし、同情よりし、兄弟の親みよりし、愛情よりして、吾人は觸乙詩人と共に、『人生とは呼吸する前の長大歎息なり』と云ふを得

べし。

吾人は明治四十年の出來事を回想し、注意して帳簿を繰返し、貸借の各項を注視すれば、喜悦に勝る哀事の遙かに多きに驚く。吾人はヴオルテーアの言を假りて、此の歳の經驗を一括するを得ん、曰はく『幸福は夢、悲哀は現』と。

予は何すれぞ、この祝祭の季に當り、暫し此の歳の勞苦より憩はんとして、而して凡百の人心を冷却せんとかする。

予は人心を冷却せんとするものにあらず、反つて人をして、苦痛は幸福の相手、悲哀の黑幕の裏には、喜樂の燦爛たる錦繡を縫ひ付けあり、刺は薔の變形なることを想ひ起さしめて、悲みに沈める人の心を樂しましめんと欲するものなり。

然り、凡ての基督敎國は、大いなる喜びの樂しき音づれを歌ふ。吾人も

亦た讃美の歌を合唱せん。されど此の喜を勝ち得んが爲には、多大の犧牲の捧げられたることを忘れじ。ベツレヘムの野に、牧羊者が、事振れの天使の歌を聞いて愕きたりし日には、ゲツセマネの園に落せる涙、ゴルゴタの山に濺がれたる血の故に幸福を得んことを夢にだにも想ひ到らざりき。實利主義と心理學とは、苦痛と快樂とを以て相反せるものなりとせんも、靈界に在りては、この相反は消滅す。此の地上に在りてこそ、北は遂に南とならず、東は遂に西とならずと雖も、北極の磁力の旣に其の力を及ぼす能はざる高天に在りては、羅針盤の指點に差別あらず。斯くの如く苦痛、快樂、悲哀、喜悅等の文字は、心念解剖の劣等なる區域に於てのみ、其の用をなす。

『大いなる喜びの樂しき音づれ』とは、『悲みの宮』に歌はれたる感謝讃美の聖歌なり。アミールが、『基督教は、悲哀を崇め、苦痛を變じて勝利となし、死の死し、罪の滅ぶる、驚くべき變態なり』と、蓋し言ひ得て眞なり。悲哀を崇拜するの故に、基督教徒を結合して、互に親睦せしめ、其の心をして、世上の悲事を見るを得しむるものなり。また此の故に、彼等を救ひて、快樂に溺れ、悲哀に沈むことなからしむ。

吾人は今や新年に入れり。希望、決心、願意皆共に新たなり。されど此の新歳のまた盡きなん時、吾人は明治四十一年もまた殆ど四十年に等しきを認むべし。眞の新年は、曆表に始まらずして、人生の書の新しきページを開くに始まり、天空に於ける太陽の位置によりて來らずして、吾人の心の生命、人、神に對する態度の變化を以て來るものなり。

供へもの

地に耕す人は、その初穂を、海に漁る人は、其の初魚を、おの〳〵神の

宮に捧ぐ。神官は燈をきり、榊の枝を振る。かくて山の幸、海の幸は清められて、神の食物たるに適す。

我等も才と力との天授を三寶に盛り、聖の聖なる者の前に陳ね、天が靈火と祝福とを以て之を清めんことを祈る。其の聖めらるゝによりて、始めて神と人との務に用ふるに足る。

我等は持てる凡てのもの、我自らをも祭壇に捧げて、神の御心のまゝに供ふ。さらば何者か能く神の召したまふ務に對し、我等を妨ぐべけんや。

日本の基督教化（序文）

吾人の間に在りて不思議を働きつゝある、細く靜かなる聲を壓して、二種の高き聲は聞ゆ。曰く『日本の爲に基督を』『基督の爲に日本を』と。日本の基督教化と、基督教の日本化とは、共に等しく基督教の傳播と、日本

の興隆とを圖る二黨の唱言なり。されど教會と政府、宗教と國家のその何れを先とすべきかに關しては、その信念を異にせり。

『基督の爲に日本を』と云ふ旗幟の周圍に集るものは、基督教を以て、假令ひ理論上よりのみ見るとも、以て全の全なるものとし、之に比すれば他に何者も考慮を値するもの無しとし、凡ての國家の障壁を打破せんとす。而して彼等は漠然神國を憶測して之を目的とす。之に反し『日本の爲に基督を』と宣言するの徒は、其の心の眼界に島帝國の光榮を望む。

此の二黨の着眼點は、絶對と具體と、主義と實際と、終極と直接との相對的價値に關し、根本的に其の觀念を異にするものなり。

二者孰れか果して廣大なる眼界を有するかは、之を知るに難からず。若しその廣さを以て優越を判すべしとせば、勝利の歸する所は自から明かなり。日本の基督教化を唱道するものは、正に終極の勝利を約する、凡ての

理論的利點を有す。耶蘇の宗教は、決して其の源泉又は其の精力に於て消盡せず。たとひ惡魔の命令によりて拭ひ去らるゝことあらんも、其の惰力のみを以てして、なほ能く未來數世紀の間に亙りて、其の功業を行ふを得べし。日本に於ける基督教信者に對する問題は、彼等は貢を國家に拂ふべくして、教會に拂ふべきにあらざるや否や、また靈界の主に優りて、地上の主に奉ずべきものなるや否やといふことにあらずして、却つて天皇の財庫を通じて、レプタまたタレントを天庫に寄進するを得ざるものなりや、或は國家の爲に盡すによりて、主たる神に仕ふること能はざるものなりやと云ふに在り。基督教徒たると愛國者たるとは、一人能く之を兼ねて調和を失ふことなし。無政府黨の唱ふるが如くに、政府國家は惡魔の業にあらず。人類の團體、殊に其の道德的羈束によりて結ばれたるものは、神意を行ふの約束ある神聖なる組織なり。

『御國を來たらせたまへ』との祈の答として期待せらるゝ基督教國とは、人智の料り得べき最高の倫理的集合體なり。予は信ず、是れ劣等なる團體の形態によりて訓練せられたる者、家族の間に在りて、父たるの愛を感じたる者、村里に在りて、愛情の交を味ひたる者、または國事に任じて、數千百萬の同胞の爲に心を動かしたる者等によりて實現せしめらるを得べきものなりと。

人類の道德的發達の現狀に於けるや、國家の政治組織は、其の到達し得べき最高の形態なり。國家の理想と利害とを超越せる何等の計畫も、此等を破壞するによらず、却つて此等を擴大し增進せしむるによりて奏功するを得ん。

基督教は世界的宗教なるが故に、日本は之を迎へざるべからずと主張する輩あり。基督教が宇內的なり、個人または人種を度外視

するものなりとの證據は何處にありや。基督教の信仰が、他の教義の系統に優越すとの確證ありや。彼の喋々として、日本を基督の足下に奉じ、之が爲に國家の特質と、古來養ひたる理想とを失ふを意とせざるの輩は、殆ど皆外國人なり。固より我が國民とは自から熱情を共にすること無きものなり。而して彼等が基督教は世界的なりと論ずる其の要點は、斯教が彼等自國民の宗教なるが故にして、換言せば、彼等は畢竟、此の信仰の基礎を愛國的僻見に置くものなり。

されば世界的宗教なりとして、日本人に與へられたる基督教は、日本人の見て、全然吾人の至善なる本能に合せざる、他國家の世俗的特徴を以て、強度に加味せられたるものを感ずるものなり。現今の基督教は一の國家的產物なりといふ得ん。

この故に日本に於ける傳道事業の方法は、彼の未だ國家的團體に到達せ

ざる人民、種族の間に於て執られたるものと、全く其の趣を異にせられざるべからず。使徒ポーロが傳教に於ける適應の手段、即ち猶太人に對しては猶太人の如く、希臘人に對しては希臘人の如くなりしこと、即ち其の周圍、境遇、事情を異にするに隨つて、之に適應したる妙機は、實に一國民を教化せんとするに於て執るべき唯一の有功なる方針なりとす。『田は色づきて、刈入時になれり』と。されど此の田は蒸氣收穫機によりて收穫するを最良とし、彼の田は大鎌を宜しとし、また彼の田は手鎌を適當なりとす。才智ある農業家は、各この田の大小、地質、形狀を研究して、之に適する器械を撰ぶ。賢しき撰擇を爲さんとには、氣候と市場とをも研究せざるべからず。器械と農田とは互に相俟つべきなり。然るに或は『田の爲に器械』と叫び、或は『器械の爲に田を』と呼び、凡ての作業にも、土地にも、同一の舊き器機を用んことを固執するものは、偏見なる農夫なり。

日本に於ける傳道方法に關する終極の解決は、凡ての價を拂つて日本を征服するか、又は凡ての缺點を有するまゝの日本を保持するかの、此の二極端に存するなるべし。

ジョン、プレストン氏が、其の著書に於て、目下の現狀に就きて下せる周密、公平なる觀察は、敬重を値し、注目を惹くべきものなり。而して其の論點は、其の結論を是認すると否とを問はず、みな眞面目に考究せらるべきものなり。宣教師事業に對する、其の熱心なる配慮は、予も亦之に深厚なる同情を寄す。予は切に望むらく、現世に於ける基督王國の發達と、日本帝國の進歩とを冀ふものは、皆凡て祈禱の精神を以て此の書を一讀せんことを。

悲みの惠

悲哀は來る、黑衣を纏ひて來り、暗鬱、陰氣たる從者を伴ひて來る。到る處として歡迎せられず、往く所として媚びられず。之が來訪を否むは、人生の習なり。

然るに悲哀の暫く留まりて、人の之に馴るゝや、其の怕るべき姿は消え、而して言ひ難き優情を以て天來の消息を傳ふ。悲哀の招きを遁れず、其の訪れを避けず、其の聲を畏れざるものゝみ、たゞ此の消息を聞くを得ん。

佛陀は、先づ人性凡百の禍患に面し、其の性質、趣旨、意義を學びしによりて、自己と弟子との爲に、此等を治癒すべき萬病藥を發見したり。自ら此等を嘗めしによりて、『悲みの人』は平和、怡樂の道を認めたり。ソクラテスはヘムロツクの毒盃を仰ぎしとき、盃底に靈魂不滅の約束の潛める

を見たり。

吾人は時々、我が肉體と靈魂とを以て、悲哀と艱難とに委ねるを宜しとす。心裡の最も貴きものを失ひて幸を得ること無からんがため、漫りに刺を抜き去る勿れ。却つて時と運との咎と譏とを耐へ、荆冠の我が身に落ちんとき、感謝して之を受くべし。

悲哀を輕んずるによりて、快樂の來ることあるべし。されど快樂よりも貴き喜あり、喜と力とは忍耐によりて生ず。艱難に忍ぶことを厭ふよりして、幸福の來ることあるべし。されど幸福に優りて尊き精神上の賜あり。惠福、感恩は忍從より生ず。

歳再び終らんとす。吾人は年始の日月を回顧し、また我等を去りて、或は地の端に、或は更に遠き彼岸に往ける友を數へ、父母、夫妻、子女を喪ひし人々を記念す。吾人はまた攝理の手によりて、殊更重き打撃を加へら

れし如くに、富、健康、地位、名譽を失ひしものゝことを忘れず。

此の世は苦悶、悲鳴に滿てり——其の滿てるや、吾人は此等を以て、單に月下の存在の下賤なる附屬物として、之を看過せんことを欲す。吾人は豈に哀れむべき不幸の徒ならずや。

されど之にも增して、最も哀むべき不幸の徒は、卽ち黑雲の後に星の輝くを見ず、死床の私語、寡婦、孤兒の嗚咽、悲哀、苦痛の叫聲の陰に、佳調の低音あるを聞かざるものなり。悲哀は他の能くせざる使命を傳ふ。悲哀の禁書を解讀し、之を以て高尙なる生涯に入るの左劵となすものこそ、實に幸にして、また眞に惠まれたりと謂はん。

自然より自然の神に

鬱々たる榕樹の陰に坐すれば、奇異なる感想いたく人を襲ふものあり。

暦表よりせば、今は仲冬の時なり。然るに此の熱帶に在りては、草木曾て休止せず、森林は綠深くして、常春の新粧を飾る。

　女皇の頸飾なる瓔珞の如くに純美なる蘭は、高く樹上にかゝり、枝間には惡戯の猿が、不躾なる惡戯をなして、太古林の森嚴を破る。密茂せる羊齒叢には、椰子の葉の風に搖ぎて、渇を訴ふる旅人を招くあり、爰には晶晶たる冷水の、珊瑚礁の苔蒸せる岩より迸るあり。予の側には茄苳(あかぎ)の大木の群樹を壓して卓立せるあり、榕樹の氣根は其の巨幹を繞りて、或は和かく之を抱き、或は烈しく之を扼す。其の下なる木立には、野生の蕃茄あり、姬蕃椒ありて、あてやかなる實の、單調なる深林に活氣を與ふるの狀は、恰も紅顏、紅リボンの小女が、茂生せる叢林よりして、畏る〳〵物を覗ふが如し。我が舊友たり、愛者たる島露草は、寒烈なる北方の空の下に於けると等しく、卑きに在りて自ら足るを知りつゝ繁茂す。溫爽たる氣候は、

糖分に富み、且つ樹質堅牢なる毛柿にも、また毒汁を分泌して、葉端に觸るゝものを刺衝する咬人狗にも、等しく懇切なり。廣葉朝顏はグツタノキに匍ひ、其の纒結せる枝間には、名も知れぬ鳥の宿りて、其の配偶を喜ばさんが爲に歌ふあり。

　鷲は卒然海上に翔下して、潮噴く鯨に戯れ、犬は近くクラアルの蕃社に吠ゆるも、樹上の小禽ために驚くことなし。

『恒春の地』、爰に太古林の蔭、人は徘徊して思を回らす。人間界の騷擾は、この林間の幽棲を侵さず。是に於いて更にまた『天然は殘酷なる繼母にあらず』して、愛あり、誠あり、施與と情念とに寛裕なる生母たるを確知するを可なりとす。

　予は常に神性の輝きの、微笑する小兒の目ざしにも、少女の恥ぢらふ顏にも、また青年の屈强なる態度にも現はれ—寡婦の淚にも、孤兒の戀々た

る眼色にも映じ—賢哲の智慧にも、父母の愛情にも、—英雄の勳業にも、美術家の畫布にも、また詩人の歌にも閃くを見るものなり。然るに今や太古のまゝなる自然の懐に、近く佇立せば殆ど自然の心の動悸を感ずるが如く、思ひは『自然より上ぼりて、自然の神に到る。』

人若し共の物質界の障壁を超越して、靈魂の宿るべき大廈を求むること無くんば、彼は卽ち一個の哀むべき禽獸たらん。動物は地界の生產物たるに過ぎざるべし。されど人よく動物に優らんとせば、自ら己が住むべき天界を發見せざるべからず。

榕樹の樹下に坐する時、自から催し來る奇異の觀念は向上し、吾人は今假令ひ地上に繫がるも、我たるもの、實に上なる天樹の幹より射出せる一の天根なるを感ずるに至る。

（四十一年一月恒峯）

自然主義

我等の靈魂が、耳に響く音のために、容易に欺かるゝは、そも〳〵底事ぞ。通常人が語る多くの言葉は空音に過ぎず。

單に音のみなれば未だしも、それが反對の意味を傳へて害を來すことあり。意義廣く、內容富みて深き言語は、何者をも意味し、また特に何物も意味せざることに用ひらる。

この頃、自然主義の語を聞くこと多し。何人も自然には反對せず。生命は自然に服從するものなり。されど二元說の哲學者を煩はすまでもなく、何人も凡ての物に二極あり、二反面あることを知り且つ感ず。空間には北あり南あり、時間には過去あり未來あり、人間は獸慾と神性とを兼有す。死と生とは共に自然の計なり。悲みは喜と共に、我等が靈魂に自然なり。

開花と結實とは、二つながら等しく自然の順行なり。されど生ける人は死せるにあらず、屍骸は生けるにあらず。花を切る人は實を棄てざるべからず、實を求めんとする人は、花を惜まざるべからず。

太宰府に詣づ

予は、再び古來の傳說、小說的話說に富みたる史蹟の地を踏む。

昨日は予、多々良濱邊の松林に彷徨ひて、靈砂の上の網干に戯るゝ日光は、十五世紀の昔、勇邁なる皇后に率ゐられ、此の灣頭に入りし勝利の大艦隊を照らせしときに異ならざるを感ぜり。

今日は海より遠く、菅公の舊蹟に在り。予は山畑の間に徜徉し、梅林の間に遊ぶ。

孤松は崇高にして哀々たる聯想の山を標す。天を拜する高丘の天拜山は、

また天の審判の座たる天判山の名ありて、シナイ山と橄欖山とを合一せる模型とやいはん。

此の高所は、道眞の日常退いて冥想祈念に耽るの地なりき。彼は悲みの人なり、其の靈魂の重荷を去らんが爲、爰に退きたり。堅志の人の涙も、天これを拭ふにあらずんば乾かず。道眞こゝに來りて、赤裸々の靈魂を神前に置き、而して彼の祈りしことは、或は次の如くなりけん。

『畏るべき審判者よ、汝の大前に、我が悲みを供ふ。予は人の力を信せず。予は寧ろ己を信ぜんと欲す。されど汝は遂に我が陰家なり。予は我が重荷はいかに重くとも、これが爲に呟かじ。然り、予は敢て呟かじ、また外より來る凡ての殃を拂ふべき力は、内より出づるものにあらざるが如くに思ひて、他の救を求めじ。汝は凡てを見、正しき審判を與へ給ふ。予は正義を求む。「父子一時五處離、口不能言眼中血」離家三四月、

落涙百千行、萬事皆如夢、時々仰彼蒼。」嘻々たる小兒の家を離れ、聖主の御座の光に耀く親しき朝廷を離れ、愛の緣に結ばれたる家族の懷を離れて流人の身となり、此の世に於て最も愛するものより去りて配所に遷り、幾夜寢ねやらずして、賓やかなる言の葉、やさしき人の業を思ふ。神よ、汝の大前に在りては、人間の榮、盡くべき樂みは消ゆ。予は失ひしものを得んがために汝の助を願はず。汝の正しと見たまふことにて、予は卽ち足れり。汝獨り永遠にいまし、汝の正義は無窮に亙りたまふ。我が良心は、汝の公義の眞にして、汝の正義の變ること無きを證す。予の人に對する行爲にして、汝の律法を破りたるものあらんか、或は予が肉に偏して、汝に對し、また己に對して不信なることあらざりしか。神よ、今判きたまへ。汝は人心に植うるに、汝の命令を知りて、之を行ふの力を以てしたまへり。若し然らずば、人は哀むべくして、卑しき動物たらん。

心だに誠の道にかなひなば、
　祈らずとても神や守らん。

十世紀の長き歲月は、滄桑の變を齎して、道眞の目の最後に見たりし此の地に過き去りたり。破壞の力は、道眞の日に於て、此の地を飾りたりし大厦、高樓の間に其の暴威を逞しくせり。幽獨の菅公が、門に倚りて纔に瓦色を看たるところは、既に旅人の目を眩せず。巍々たる都府樓の在りし所は、僅かに瓦片の蹟を留むるあり。流罪の賢人の配所に靜かに響きて、時を報じたりし鐘聲も、今や觀音寺の巨刹に鳴らず。梵鐘、鐘樓、はた寺院にありて、彫刻の美を誇りし柱梁も、抹漆の天井も、今や毫も殘存せず。美名と人の精神との世に傳へらるゝことの久しきは、技術工藝の興せる巨大なる記念碑に勝るを思へ。聞くならく、觀音寺の建立は、帝王七代、年

時七十餘を閲したりと。然るに康平二年夏の一夜、火猛かに起りて、全寺灰燼に歸せり。されど大美術家たる神の手によりて彫刻琢磨せられたる道眞は、なほ天の至高なる成品として吾人の記憶に生く。吾人は首を回らすところ、丘陵、谷地、農夫の茅屋に於ても、また燦燃たる宮殿に於ても、此の偉人を見るの感あり。見よ、田畑にまた路上に、數頭の牛の勞役するを。道眞は昔彼等の堅忍なる勞作、遲々勞行して毫も屈せざるを見て之を喜びたり。梅花が其の芳香を放つは、菅公の枝下に佇立したりし日に異ならず。清白なる花瓣は、陰鬱たる巨楠の枝葉に映じて、吾人をして菅公少年の詩を想起せしむ。

月耀如晴雪、
梅花似照星。

夫れ斯の如く、營々たる牛群より、天に閃く星の光にいたるまで、物み

な優にやさしく、殉道の聖人を記念す。煉金術の祕藥の如く、道眞の記念に觸るゝところのものは、何物をも化して金となす。また敬神なる農民が小籠に盛りて門戸に懸け、以て惡靈を拂ふ、多々良濱邊の靈砂の如く、道眞てふ名のみ、既に人を刺勵して、此の世の奸惡に抗するを得しむ。其の靈は今なほ吾人の間に活動す。

時は去り、世は移れり。されと到處とし、また何の世に於けるも、彼の名は愛敬せられ、尊重せらる。人にして高邁ならば、その德は永遠遍在にして、殆ど神に近し。予は太宰府天滿宮の靈前に立ちて、切に斯の感をなせり。

隨想錄終

大正七年六月二十一日印刷
大正七年六月二十五日發行

隨想錄
定價一圓二十錢

著者　新渡戸稻造
東京市麹町區平河町四丁目十三番地
發行者　土屋泰次郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍第一工場
印刷者　青柳十一郎

東京市麹町區麹町三丁目四番地
發行所　丁未出版社
電話番町二八二〇番・振替東京七八四七番

大隈侯爵序■森鷗外先生題言

櫻井忠溫著

◁文部省認定圖書・第五十版▷

銃後

袖珍上製函入・三三八頁

定價金壹圓・郵送料八錢

口繪コロタイプ――死骸番の兵士

――日本及日本人評――

戰後七年、再び旅順を訪うて、悲風蕭條たる殘壘に立ち、蟲聲喞ぶに似たる戰友の墓所に徘徊し、涙を飮んで筆を執りたるは『銃後』也『銃後』の名は元英國大使マグドナルド氏の『日本の戰捷の最大動力は蓋し銃後の人にあり』と云るに採れりと云ふ――此篇充分に戰爭の全圖を靜觀し回想し、之れを背景としたる銃後の人を描きたれは最も冥想味に富みて人をして回顧無限の感に堪へさらしむ――悲愁滿眼眞味の油然として人の胸を撲つものあるを思ふ。

■東京麹町三丁目　丁未出版社發行■

新渡戸博士著

■英文武士道
定價壹圓二十錢
郵送料八錢

■邦文武士道
――櫻井鷗村譯――
定價壹圓二十錢
郵送料八錢

■英文隨想錄
定價壹圓二十錢
郵送料八錢

野邊地天馬著　平井武雄畫

新刊

舊約物語

お家庭の讀物として面白くて爲めになるお話を御紹介[illegible]たいといふ思付きから野邊地先生はこの本をお書きになりまし[illegible]井先生も美しい印象をお與へしたいとお考から挿畫に[illegible]を揮はれました。飜譯でなく日本人の手からこういふ立派な本[illegible]書かれたことは小年文學の名譽であります。

挿畫（エデンの園　ヨセフ埃及に賣らる　エリアと天火）

目次　●ノアの洪水　●葦の方舟　●獅子の窟　●アブラハムとイサク　●ダビデの初陣　●エステルと王樣

四六判上製
[illegible]字假名付
定價[illegible]圓五拾錢
郵料八錢

發行所　東京市麹町三丁目　振替東京七八四七　丁未出版社

陸軍歩兵少佐　櫻井忠温著

肉彈

袖珍上製函入・二六〇頁
定價八拾五錢・送料六錢

世界的名著――明治文壇の傑作

故陸軍大將伯爵　乃木希典閣下題字
侯爵　大隈重信閣下序文
米國前大統領ルーズベルト閣下書簡

口繪　勇卒近藤竹三郎負傷の著者を[illegible]て旅順望臺の敵壘を脱する圖――著者左筆書――コロタイプ

文部省認定圖書――第二百版

肉彈の譯本　英譯（日本版　英國版　米國版）　獨逸譯　佛蘭西譯　伊太利譯　露譯

發行所　東京市麹町三丁目　振替東京七八四七　丁未出版社

ミス、ベーコン 本田增次郎 共譯

〔第十一版〕

〔天覽〕

英文肉彈

四六判上製
定價壹圓貳拾錢
郵送料八錢

明治三十七八年戰役の後に外國の軍人が多勢日本に來て軍隊に附いて勉強する何を勉強するのかと共眞意を探て見ると軍略でも戰術でも無い實は日本が露國に勝つたわけの日本人の精神を研究に來てゐるのである精神を最も明白に書き現はしたものは肉彈の外にないそれで外國でも此書が大切にせられてゐる現に露國の志士が肉彈を讀んで初めて露國の負けた所以が分つたと公言してゐるさて外國人ばかりでなく日本人も自分等の精神の高尚な所はドコだかと能く知て此精神が衰へぬやうに努めるには肉彈のやうな書物を是非讀んで頂きたい。…………

發行所
東京市麴町三丁目
丁未出版社
振替東京七八四七
電話番町二八二〇

野邊地天馬著 南薰造畫

新刊

新約物語

四六判上製
四號活字假名付
定價一圓五十錢
郵送料八錢

世界の寶典たる新約聖書を何人にも面白く少年少女にも自由に快讀し得らるる物語として輕妙に述べたるものなり、その嶄新なる着想と奇拔なる敍述とは新約の事蹟を躍如たらしめ、現代の吾等をして見るが如き感興に堪えざらしむ。且つ九葉の挿畫は優美なる三色版にして悉く洋書界の泰斗南薰造先生の麗筆に成り内容外觀共に傑出せる書たるを凝はず。

挿畫目次

(1)博士の出發 (2)エジプトへ (3)ヨルダン河
(4)隣人 (5)ヤイロの娘 (6)一疋の羊
(7)曠野 (8)イースター (9)ポウロの甥

發行所
東京市麴町三丁目
振替東京七八四七
丁未出版社

櫻井鷗村著

リンコーン物語

縮刷上製・定價壹圓二十錢・郵送料八錢

■模範的偉人傳■

古今の英雄俊傑其人に乏しからず、然もリンコーンの如き偉大の人格は稀なり。米國四十萬奴隷の鐵鎖を解きたるが如き其の大統領となりて、國難を救ひ人道を正しくしたるが如き、其の勳績偉大ならずや、彼が後年世界人類崇敬の中心となる蓋し謂なきに非ず、著者努めて此の偉人の人格性行を發揮せんと五ヶ年の日子を費し參考渉獵本書を成す。想ふに邦文に成れるリンコーン傳中、如斯く彼の面目を活躍せしめたるは無からん乎。

■文部省認定圖書■

發行所　東京市麹町三丁目　振替東京七八四七　丁未出版社

31
389 1

終